

生鳥沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 125 号

鵠沼を語る会 創立50周年記念講演特集

講演録 開山700年「遊行寺の歴史」

～生き仏遊行上人の宗教活動～ 圭室 文雄 1

講演資料 23

質疑応答 41

講演会 聴講者アンケート 49

<お話> 医師「福田良平」を語る 石山 美和子 54

50周年記念 大磯史跡めぐり 58

「鵠沼を語る会50年のあゆみ」 市民センターまつりで展示 64

活動の記録(令和6年12月～令和7年12月) 67

編集後記 72

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鵠沼を語る会 発行

鵜沼を語る会創立 50 周年記念講演会

開山 700 年

遊行寺の歴史

カリスマ的存在「生き仏」遊行上人

日時：11月8日(土曜日) 午後1時30分開演

受付は午後1時から 講演時間は1時間30分予定 無料

場所：鵜沼市民センターホール

講師：たまむろ ふみお 圭室 文雄氏

歴史家 明治大学名誉教授



共催：鵜沼を語る会 鵜沼市民センター

<お問い合わせ> 鵜沼市民センター 0466-33-2002(平日 8:30-17:00)



開山 700 年 遊行寺

遊行寺の歴史

講師 圭室 文雄先生

鶴沼は、かつて高座郡藤沢町鶴沼海岸という地名でした。高座郡というのは相模川の東側、川をさかのぼって高座郡でした。相模川の西側は大住郡でありました。現在、高座郡に属するのは寒川町だけがあります。それ以外はみんな市になりました。



講演をされる圭室文雄先生

昭和 15 年（西暦 1940 年）は紀元 2600 年という年で全国で町村合併して多くの市が出来ました。藤沢市もその時に市になりましたが、その時の人口は 3 万人であります。現在、今年の 10 月 1 日の人口が 44 万人を越えております。

こういう市は非常に珍しいと思います。人口急増したのは 1960 年代からで、今後もっと増えるかも知れません。

鶴沼を語る会ができてから、ちょうど 50 年になるということで、大変おめでたい年でございます。こういう会はやはり幹事がしっかりしていて、そしてその人たちが中心になって、作業を進めてくださるから長持ちするんだという風に思っております。



受付は午後 1 時に始まり資料が配付された

私も会員の 1 人ですけど、あんまり真面目な会員ではございませんので、申し訳なく思っております。

非常にいろんなテーマについて会誌も出していらっしゃるし、いろいろ勉強になることも多いと思います。



そこで今日お話ししますのは遊行寺でございますが、この行事については、皆さんご存知だと思います。11月の27日に「一ツ火法要」というのがございまして、その時においでになった方もいらっしゃると思いますけれども、難しいことではなくて、南無阿弥陀仏というのを15種類に分けて、イントネーションを15種類に分けてですね、法要をいたします。

ホールは多くの聴講者で埋まった

まず全部の電気を消します。そして、ろうそくの火も全部消してしまいます。遊行上人はその時一度退席し暗闇を行きまして、風呂に入って精進潔斎してまた登場します。

その暗闇の中で火打石で火を起こしまして、その火を今度はまた15段階の南無阿弥陀仏を唱えていく。そしてだんだん、だんだん火を広げて、つまり、末法の世界で暗闇になったのを新しい世界に帰っていくという、そういう論理ですね。

もう一つは庶民が割に参加しやすい。つまり、仏教の経典を読むわけではございません。南無阿弥陀仏と唱えさえすれば、その15段階の儀式というのが信仰されました。まあ、そういうものですので、昔から信仰が非常に強かったということでございます。

テキストには目次的なものが最初にございますが、それをちょっと説明させていただきます。

第1章ですね。「遊行寺と別時念仏会」とありますが、別時念仏会(べつじね

んぶつえ)というのが一つ火法要として今日行われております。それと遊行寺の簡単な略史に分けて説明します。

第2章は「日本仏教の中の時宗の存在」ですね。時宗がどの程度の力を持っているのかということをございます。現在の日本仏教の諸宗派、時宗は大きな宗派でございますが、その中で何番目ぐらいに入るのか。寺数でございますが、それで検討してみたいと思います。それから、江戸時代にはどのくらいこの時宗のお寺があったのかということをございます。

第3章「中世の遊行上人と権力者」と書きましたが中世の遊行上人が何人いたのか。そして天皇や將軍との関係はどういうものだったのか。それから戦国大名のとの関係ですね。中世のところではですね、中世といいましても室町時代のことになります。そこでは以下の3つ、遊行上人の廻国地域、天皇や將軍との関係、戦国大名の保護について、お話しします。

第4章の「近世の遊行上人と幕藩領主」 近世は江戸時代のことでございます。

第5章に「遊行上人の布教方法と利益」 遊行上人がどういう布教方法で、そのご利益はどんなものがあつたのかということをお話したいと思ひます。

では、まず最初のところから参ります。

1 ページ目をご覧ください。

正式な名前は遊行寺ではなくて清浄光寺と申します。そこにありますように1325年に吞海という人が開創しました。

吞海のお兄さんの俣野五郎景平というのは鎌倉幕府のご家人です。この人が地領を持っていたところは現在、俣野という地名が残っております。小田急の善行駅から東の方に入ったところに西俣野というのがあります。それから境川を挟んで、その反対側は横浜市になりますが、そこに東俣野というのがあります。そこが、俣野氏が鎌倉時代から室町時代に支配していた場所でございます。

その人がスポンサー、つまり外護者であります、スポンサーになって清浄光寺を始めたという風に言われております。

それで遊行寺というのは、遊行上人っていうのは何かといいますと、この宗派は他の宗派と違ひまして、大僧正である遊行上人が全国を6~7年かけて廻るんであります。ですから、普通の宗派ですと、その宗派のトップの人は大抵大本山の奥の方に居て民衆と接することは殆どないんです。



「一遍聖絵」

ところが、時宗の場合にそうではなくて、その上人の方から全国を廻った。最初は一遍上人という人であります。この人の「一遍聖絵」という巻物があります。

全部で12巻ございます。大体、1巻が10mぐらいございまして、絵が描いてあって、その説明が書いてある。そしてその一遍上人の一代記ですから、生まれた時から亡くなるまで、どういうところを歩いたかというのが絵入りで書いてあります。

それを見ますとほとんど全国歩いています。北海道と沖縄は行っておりませんが、それ以外の本州四国九州くまなく歩いております。そして南無阿弥陀仏という念仏を唱えて、民衆と接して御札を配る。その御札は今も一ツ火法要の時に皆様がおいでになると、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」というお札があります。小さなお札ですけど。それをですね。全国を廻りながら配って歩くのが一遍であります。

最後は、兵庫県の神戸で亡くなりますけれども、そういう布教方法を取ったの



遊行寺の一遍上人像

は時宗だけです。他の宗派は末寺のお坊さんが我々庶民と接触するということはございますけども、大本山のトップがですね、我々のところに姿を表すことはまずありません。そういう意味でこの宗派は変わった宗派だということでもあります。

小田原の北条早雲と三浦半島の三浦道寸という戦国大名が戦争をやり、お互いにその土地の取り合いをやるわけですが、その時に遊行寺も大火に見舞われまして、時宗の大本山を茨城県の水戸の寺に移します。神応寺、神に応ずる寺と書くんですが、ここに移します。これが戦国時代ですね。

ですから約100年ぐらいは今の遊行寺のところにはお寺がなくてですね、要するにお堂が全くなかったということでございます。それが江戸時代になって復活したということでもあります。

遊行寺はご存知の通り、旧東海道に面しております。旧東海道に面しておりますので、全国の大名が参勤交代で1年交代で全国から歩いてきます。その時には西国から来る大名は必ずこの東海道を通るわけです。

ところが藤沢の宿場はですね、宿はありますけれども、参勤交代でいくつかの大名が来たとしても対応できません。そこで遊行寺に泊めて欲しいという人たちが出てきます。遊行寺も積極的にそういう人たちを泊めます。

それは裏返して言えば、そういう大名の領地を遊行上人が代々廻りますから、そういう意味でもですね、お互いにつながりを持つことができます。そういう点で、東海道と遊行寺の関係というのも非常に大きかったと考えられます。

この文章を書かれた橘俊道先生は、お亡くなりになりましたけれど、大正大学の先生で藤嶺学園藤沢高校の校長を長くなされた方です。

2ページに参ります。

歳末別時念仏会とありますように本来は年末に行うのが一ツ火なのです。その火を貰って帰ってお正月の料理を作るといのがこの火のあり方で、提灯を持って行って、その提灯に火を移して遊行寺との繋がりをつけてですね。お正月のご馳走を作る。あるいは風呂を沸かすという、そういう流れが大正の関東大震災の頃までは続いておりました。

だから、この地域の人たちにとってはそういう意味があったので、その信仰そのものより年中行事の1つとして、そういう考え方がありました。

本来は年末の1週間、修行をするわけでございます。けれども、今は末寺のお坊さんたちがその時やってきますので、末寺のお坊さんたちも年末は忙しいということで、ひと月繰り上げて11月の27日、それはちょうど、年末の最後の1週間の中心にあたりますので27日に一ツ火法要を現在は行っているということでございます。

詳しくはそこに書いてございますので、ご覧になってください。これを書かれた長島尚道さんという方も大正大学の先生で、定年でやめられて一遍上人が亡くなりました神戸の真光寺という寺の住職をしておられます。そのお寺には一遍上人のお墓があります。

この資料によりますと、他の寺では12月にやっているところもあるんじゃないかというようなことが書いてございます。後の方の4行ぐらいです。

相模原市の当麻というところに無量光寺というお寺がございまして、そこは12月の26日、神戸の真光寺は12月の27日、新潟の十日町にあります来迎寺は10月の22日から23日というように、それぞれお寺の都合もあるのでしょう。

3 ページ 第1表 「現代の日本仏教諸宗派」の一覧表です。

ここで、じゃあ時宗は一体どのくらいの寺数があるのかを見ていきます。

現代の日本の仏教教団というのは、たくさんございますけれども、その中でもここでは、そこに書いてございますが、末寺が200以上の宗派を表示しております。

文化庁が宗教年鑑というのを出してございまして、その1987年の分をコピーしてまいりました。これでご覧いただきますとですね、時宗はどの辺にあるかといえますと、ちょうど真ん中あたりですね。1行ですけども時宗とあって、時宗清浄光寺・神奈川県・寺数412となっています。現在412ヶ寺ある、というのを他宗と比べると1番下です。

総計を見ていただくと7万4508とあります。パーセンテージを出すと0.6%位ですか。大したことないじゃないかという風に普通考えがちなんですけども、そうではないということをごこれから説明させていただきます。

では、1番数の多い宗派はどこかといいますと、4段目のところに浄土真宗系というがあります。これが全国で2万978ですね。約2万1000ヶ寺で、これが1番多い。2番目に多いのはどこかというところから3つ目です。

曹洞宗という禅宗の一派ですけども、これが1万4686。それから3番目が上から2つ目の真言宗であります。これにはいろんな派がございまして、それぞれの本山の寺名、府県名も記してあります。これが1万2488ヶ寺。4番目がそのすぐ下の浄土宗系で、これが8250。それから5番目ぐらいまで行きますかね、1番下です。日蓮宗系、これが6635。こうやって寺数だけ比較しますと、時宗は非常に少ないんです。

これは諸宗派を掲げておりますが、時宗はそのうちの9番目ということになり

ますね。これより下は融通念仏宗という時宗の下の行にある 356 というのが 1 番少なくて 10 番目になります。

それから 1 番下にその他の教団とありまして、これが 10 宗派あると書いてございます。10 宗派の総数が 38 ですから、2 つとか 3 つとかいうような教団もございませう。

さて、それでは江戸時代にはどのくらいあったのかというのがその次の表でございませう。

4 ページ 第 2 表 「時宗遊行派寺院分布表」を見ていただきます。

全体で 1 番下に総合計で 1089 とあります。現在 400 ちょっとですから、現在は当時に比べると 40% で、60% の寺は廃寺になった。潰れた、という風に考えていただければいいと思います。

それでは時宗はどの地域に散らばっているのかといいますと、ほぼ全国に散らばっております。ですから、0 と書いてあるところ以外には末寺がございませう。で、地域別に見ていきます。多い順に 5 位まで見てみましょう。

まず 1 番多いのは関東地方です。左の上から 2 段目になりますね。238 です。それから 2 番目はその下で東海地方で 127 あります。それから 3 番目はその下で北陸地方で 114 ございませう。4 番目はですね、右の方の下の方になりますが、九州地方で 103 になります。それから 5 番目はですね、左の 1 番上で東北地方 71 ということになります。

しかし、そのそれぞれの地域で 3 桁の数字というのは、ちょっとないですね。50 を超えるのはいくつかございませう。例えば関東地方の常陸茨城県 71 ですね。左の 5 行目のところになります。同じく 25 行目の越前福井県 61 ですね。

同じく 33 行目近畿地方山城京都はいくらか強くて 36 ございませう。こうやって見ていただくと 1 番多いのは、さっき申し上げました左の 5 行目、常陸の 71 というのでございませう。

なぜ茨城県が多いかと申しますと、遊行寺が焼けてしまった時に本山になった水戸の神応寺があるからで、今でも藤沢という地名が残っております。それ以外に右の方の 1 番下ですけれども、現在は時宗の一派なんですけれども江戸時代はですね、そこにありますように右の下の方、遊行派以外の時宗の派ですね。一向派とか市屋派とかいうような形で 8 つのセクトですから、遊行派を入れると 9 つのセクトがあったということになります。

それにしても江戸時代も大したことはないじゃないかということになりそうですけれども、それでは今度は中世の室町時代のところから見ていこうと思います。

5 ページの第3表「中世の遊行上人廻国地域」をご覧ください。

1 番左の方に上人名がございまして、1 番最初の遊行上人だったのは一遍という方でこの人がこの宗派を始めた人であります。

そこに遊行上人を務めていた在位期間が和暦と西暦で書いてございます。次に廻国地方が書いてあります。どのように廻国したかという、関東地方からまずスタートしまして、それから東北地方の太平洋側をいきます。そして青森まで行きまして、今度は日本海側の東北地方を降りてきます。そして、ずっと中部北陸、それから中国、九州、四国。それから畿内、特に京都では長居します。そして、東海を通過して藤沢まで帰ってくる。

大体6~7年かかります。そして、1日に3回勤行をやります。そしてその勤行が終わりますと、その後、遊行上人が御札を配ります。南無阿弥陀仏の下に六十万入決定往生と書いてある。六十万入っていうのは六十万入だけが往生が決まったというわけではないのです。

で、この御札をもらいますとですね、現当二世といまして、現世と来世。この2つの安穩を保障する。だから今生きている時はですね、病気にもかからない。そして亡くなったら必ず極楽往生できるという。こういう、まあ片道切符なんですけど、帰る切符はもらえません。その片道切符ですけども、現当二世を保障するといふのですから、こんな有難い御札はないわけであります。

まあ、今の値段でどのくらいか分かりませんが、それは後ほど推定してみますが、遊行上人が自ら渡す、大僧正が我々に直接渡してくれるということですから、付加価値をつければ御札を買おうと500円ぐらいだけど、多分1000円くらいは今の価値ですという推定をしてみました。そうするとどのくらいの収入があったのかという、ちょっと、さもし根性ですけども、そういうことも考えてみました。

多分こういう形ですね。一遍が廻っておりますけども、これは先ほど申し上げました一遍聖絵というその国宝の絵巻物がありまして、全12巻なんですけど、1巻だけ欠けていて11巻なんです。現在は、京都博物館と奈良博物館に預けてあります。どっちかが6巻でどっちかが5巻です。国宝ですとお寺で持っているには、ちゃんとその管理をする職を作ってですね、簡単に泥棒に入られないように

しなければなりませんので、むしろそういう国立博物館に預けた方が安心だということで預けてあります。

これは最近、最近っていいまでも 30 年ぐらい前になりますけども、歓喜光寺っていうお寺が中世以来、その一遍聖絵を持っていたんです。ところがその歓喜光寺が経済的に苦しくなって、それを売却するということになります。

それでアメリカのボストン美術館とかフランスのギメ東洋美術館とかいうのが入札に応じるということで、いくらで買うかということなんですけども、よく分からないんですが、20 億ぐらいはするだろうという風にいわれていたのです。

ところがですねえ、時宗にとってはこれはもう 1 番の宝物なのですね。そういうわけにはいかないということと、それからもう 1 つは国宝でもありますので、国としても、そう簡単に外国に売ってもらっては困るということですね。

色々知恵を出しまして、それで 1 巻 1 億円として 11 億。11 億の金をですね、時宗が、つまり遊行寺が 5 億 5000 万、国が文化庁が 5 億 5000 万で、それでなんとか国外流出を食い止めて、先ほど申し上げたように奈良と京都に保存してあります。

なかなか難しく色々ゴタゴタしましたがけども、結局はまあそういう形で時宗としては、国と両方で 5 億 5000 万ずつ出してですね、権利書ってのがあるのですけど、それは各々両方が持っている。ですから片方で売りたくなくても売れない。国で売りたくなくても、これは遊行寺がウンといわなければ売れないっていう、そういう形で今残っています。

一遍聖絵はもうとにかく時宗としては目玉ですからね。それでちょっと話が長くなりました、一遍上人の一代記であります。

表に戻ります。2 番目の、真教というこの人。この人も一遍に従って廻っております。一遍が亡くなってからも全国も廻っております。それから 3 番目の人も全国を廻っております。7 番目の人も廻っております。それ以外の人は必ずしも全国を廻っておりません。これは体の調子とか、地震があつて災害があつたり、それから不作だつたりして廻れないこともありました。表の○の所は廻っております。

そしてその先ですが遊行相續地と書いてあります。これは遊行上人が次の人に引き継ぐ場所でもありますけれども、江戸時代になりますと藤沢道場で引き継ぐのが筋なんですけれども前の上人が途中で亡くなつたり、もう臨終か、ぼつぼつ危なくなってきたという時にですね、そこへ行きまして、引き継ぎをします。遊行相

続地という欄を見ていただきますと、5人だけがですね。この30人のうちの5人だけが藤沢道場で引き継ぎをしておりますけれども、それ以外の人はみんな藤沢以外で引き継ぎをしております。リレー方式みたいな形で引き継ぎします。

そしてゴールは藤沢なんですね。ですからそこで亡くなるのが筋なんですけど、これは1番右の方ですけども数字が1から12まであります。この12人は藤沢に帰ってくると遊行上人は藤沢上人となって亡くなるまで遊行寺で暮らした人です。30人のうちの12人ですから40%ですね。60%の人は藤沢以外で亡くなった。旅の途中で亡くなったことになります。

それで文永から永禄の間に30人の上人が相続したということがわかります。そして12番目のところに尊観という人がおりますが、この人は皇族です。龜山天皇の孫に当たる人ですけど、この人はですね、1番右を見ていただくと、下関の専念寺と書いてあります。ここで亡くなるんです。時宗の寺です。

私はこのお寺に調査に行ったことがあります。そこには尊観のお墓がありまして、「立入り禁止 宮内庁」と書いてありました。ということは、国も皇族として認めているということですから、間違いなく皇族だった方だろうという風に考えられます。

その他にはそういう貴人はいません。中世には30人の遊行上人が廻国したのは今申し上げたような形で、全員が全て廻ったとは言い切れませんが、かなりの上人が非常に広い範囲で廻っております。

6 ページ目になります

ここでは、いわゆる権力者との繋がりということを見ていきます。

相模の国の古文書を編集した本で「相州古文書」というのがございます。角川書店から出ています。各資料に番号が1882とか1892とか書いてありますが、その古文書の整理番号ですから、あまり気にしないでください。その中から遊行寺についての資料を拾い出してみました。

1番最初は将軍家足利義持。これは室町時代の4代目の将軍です。この人が与えた御教書というのがあります。遊行上人に対してですね。こういう権利を与えるということです。

清浄光寺藤沢道場・遊行金光寺七条道場時宗、人夫・馬・輿已下、諸国上下向事上向というのは上京すること、この頃は京都のことをいいます。下向というのは京都から外へ出ていくことをいいます。

関々渡し、関所とそれから川の渡し。押手判形を以って、判形というのは、將軍のサインですね。花押と普通いいますけど、サイン。それから押手は印鑑ハンコですね。それを持ってその下にありますように煩いなく看過すべき旨、ですから、このハンコ、この資料に押しingてありますから、これを持ってですね、どこを通る場合にも通しなさいっていうわけですね。タダで通せということになります。

守護人に仰せつけられると、国々の守護人に仰せつけられる、とありますように守護大名に対して將軍から出されておりますので、もし違反の在所これあるにおいては、とありますように、もしそこでこの一行を止めたりして、通さなかったりしたら罪科に処す、処罰するといっているのです。これをもらうようになってから、これが応永23年でありますから、1416年ですけども、この1416年以降はですね、この証文を代々の將軍が出しております。現在、史料に残っているのはその一つ飛んで1893という6代將軍ですね。足利義教。これの証文は全く同文ですけども、こういう形で代々の室町將軍が発行していたのです。

だから、室町幕府が遊行寺並びに金光寺ってのは遊行寺の町にですけどもそこにいる時宗の僧侶たちが、いろんなどころを通る場合にはですね、無料で通しなさいっていうことをいっているのです。

それから天皇との関係ですけども、これは1892という2番目の資料です。そこを見てください。宜しく国家安全宝祚長久を祈り奉られ院宣此の如し、よって執達件の如し、としてあります。これは後小松天皇、天皇が上皇になった時出した文章であります。これは院宣というのは勅願寺に出すものでありますから、勅願になったことで、勅願寺になるとどうということかといいますと、国家の安全の祈願と宝祚長久と天皇の地位が長からんことを祈る、そういうことをこの寺はやれということになります。

ということは天皇の葬祭、それから將軍の葬祭、それからいろんな儀式、そういうものに参加できる資格がもらえたという。これ、勅願といまして、詔勅の勅という字と、願うという字を書きます。ですから、寺格が非常に上がったということでもあります。

それからその1番左側の1905大内義隆というのは、これは戦国大名で現在の岡山県から山口県まで、要するに中国地方ですね。中国地方全体を所領として持っていた戦国大名であります。

その人が遊行上人に対してどんなことをいっているかといいますと。分国に至りご遷行の由、尊書預かり候、諸篇疎略あるべからず候、随って扇子一柄、引合

い十帖、絹十疋、拝領せしめ候、恐悦の趣、宣しく披露給わるべく候とありますように、遊行上人がこの中国地方を廻国するにあたって、戦国大名の義隆に手紙を出して、さらにそこにありますように、扇子一柄、それから引合いというのは和紙ですね。それから絹というのは絹布です。それを上人が送ったんですね。それについての礼状であります。そこに来たら歓迎するということだと思います。

7ページに入ります。

資料番号 1906 今川義元。これは、そうですね。愛知県静岡県あたりに勢力を張っていた戦国大名であります。この人から上人に対して手紙が来ております。尊札拝見、本望に候、お手紙をいただいたことを、私としては本望です。

萌黄緞子、緞子というのは絹織物でございます。それから杉原十帖を贈呈頂き大変喜んでおります。それに対して沈香、茶碗それから盃 ハチ と読むんですが、ちょっと変わった字ですが青磁の鉢ですね。これを進献候とありますから今川義元の方から献じますということです。沈香はお香のことです。それから、盃。これじゃ青磁というから、日本ではなくて中国か韓国のものだと思いますけど、それを差し上げます、聊か表賀の儀に候ですね。厥国っていうのはどの位の間、私の領地に逗留なさいますか。必ず拝顔の時を期し候とありますから、必ずお目にかりたいと思っております。非常に近親者的ですね。

こういう形で、先ほど出ました將軍の古文書がありますと、どこの大名もですね、積極的に保護をしてくれるということになります。

それから資料番号 1908 信玄書状というのでございます。

これ武田信玄のことですが、武田信玄は甲斐の国ですから、山梨を支配した戦国大名。定めとありまして、相模の国藤沢二百貫、同州俣野の内百貫とありますね。

右、このように寄付いたします。なお、関東静謐の上は、ご本領のうち、重ねて一所進めおくべきの趣。尊く得べく候、恐慌敬白とあります。これは 1571 年元龜 2 年ですけども、彼は 2 年後に滅びるのですね。だからこれは、本当にもらったかどうか分からないんですけども、これは江戸時代ですと 200 石とか 100 石とかっていう石高で、それだけ取れる土地を与えるということなんですけども、中世の場合には銭何貫文という形ですから、どのくらいの規模だったかはちょっとわかりません。

しかし、いずれにしても、相当な土地を信玄が与えるということは、武田信玄がこの辺を支配していた時期があったのかなという風に考えられます。

次、資料番号 1910 は北条氏直判物です。

これは小田原の北条氏で、北条氏は豊臣秀吉に滅ぼされるのです。1590 年に小田原城は落城します。天正 15 年は 1587 年ですから、その 3 年前、滅亡直前に北条がこういうことを言っております。

道場造営について、誰人も領中においても用木見当次第、これを取るべく候。よって件の如し。つまり先ほど出てきましたように、北条氏と三浦氏が戦争した時に遊行寺が燃えてしまいましたので、新たに建立のため木材調達の許可をしよう。この天正 15 年頃にですね、遊行寺としてはもとの場所に建てようと考えていた時に領主である北条氏直はですね、道場を建てるについては自分が支配しているこの辺は、誰の土地であっても構わない、用木その建物に使う木が必要だったならば、どれを切り取っても構わないということを与えております。

そのように考えると、武田信玄の書状と北条氏の直判物というのは、空手形に終わったのではないかな、という風にも推量できますね。

では、次は江戸時代のところになります。

8 ページ 第 4 表 近世の歴代遊行上人 に参ります。

近世、江戸時代のところですね。近世の遊行上人と幕藩領主と書きました。まずは近世の遊行上人は何人いたのかということですが、32 代の普光から 58 代尊澄まで 27 人です。第 4 表であります。それをご覧ください。

この間 27 人いるんですよ、全体で。これが江戸時代を通じて遊行上人であった人の在位年代とありますように、遊行上人として全国を歩いた期間です。これで見えていただきますと、33 代の満悟上人は 23 年かかって全国歩いています。それから 2 桁以上かかっている人は、42 代の尊任 15 年、34 代の燈外 14 年ですね。それから 35 代の法爾 13 年、51 代の賦存 12 年、56 代の傾心 11 年、57 代の一念 10 年です。以上の人々が 10 年以上かかっております。けれども、後の人は概ね 1 桁ですね。45 代の尊遵は 6 ヶ月、半年で亡くなっていますね。

そしてですね、1 番最初の人の上人になったのは 1584 年で 1 番最後の人が 1870 年に入滅します。藤沢に到着できず、国府津まで来て亡くなります。

それで 1870 から 1584 を差し引いて 27 で割りますと大体 1 人、平均 10 年ぐらゐの刻みになります。ということは、全国のこの遊行上人が廻る流れはですね、10 年に 1 回は自分たちのところにやってくるんですね。そういう形で上人がやってきますので、末寺としては檀家を積極的に獲得しなくても 10 年刻みで遊行上

人が自分の寺にやってきます。その時は藩主が寺や様々なお堂などを建て替えてくれます。

49代の一法。この人は藤沢の人です。藤沢の西富ですから遊行寺のすぐ下に住んでいた青木家の出であります。青木家は今でもたくさんの遊行寺の古文書も持っておられて、その古文書は現在、藤沢の文書館に寄託してあります。

その一法上人について、もう少し詳しく申し上げます。つまり、民衆の側としてはその10年に平均すれば10年に1回ずつ遊行上人がやってくる、末寺としても檀家を無理に勧誘しなくてもいい。

上人到着寸前まで藩主が大名が寺をきれいに作り変えてくれるし、それから、もう一つはですね、いろんな建物で一行を受け入れる。一法の場合ですね、この廻国して歩く時の人数は、1番多い時81人なんです。81人の人を受け入れるのはそれぞれの地域や城下町で大体6つか7つ必要です。その中に時宗の寺は当然入ります。そこが中心になって遊行上人を泊めるわけですね。で、周りの他の宗派の寺にも協力してもらおう。それはその地域の大名に、大よそ半年前に今年の何月何日から何月何日まであなたの城下町で布教しますよ、ということ連絡します。

そうすると大名の名でその段取りで計画を立てます。そうすると時宗の末寺が中心になってやりますから経済的な意味ではですね、建物を建てたり、なんかするのはみんな大名がやってくれる。

他宗の寺はそうはいかないんですね。檀家から寄付を集めて、そして寺を運営していかなきゃならない。その辺がちょっと違います。

だから、江戸時代後の時宗の寺が6割がた潰れてしまったのは藩の支援がないからです。檀家がないから時宗の末寺は6割方は潰れてしまったということになります。もう少し後ほどお話しします。

先ほどの中世と違って、今度は藤沢スタートしているのが多いです。上から3番目までは違いますが、それ以外は全員、藤沢の清浄光寺からスタートしています。ここで相続していますね。そして、帰り着いたのが何人かというのを見ますと、中世に比べればかなり帰ってきております。15人ぐらいはですね、清浄光寺に戻ってきていますから、半分以上ということになりますね。

だから4割方ぐらいは藤沢以外のところで亡くなっている人もいますということでもあります。

さて、それでは9ページご覧ください。

伝馬手形というのですが、これは将軍が発行する手形であります。

46代尊証、47代唯称、48代賦国、49代一法に対して発行された伝馬手形です。これまでお話ししてきましたように、中世からずっと遊行寺というのは将軍の朱印状といいますが、そういう手形を見せながら全国を廻るので、それぞれの大名たちも接待せざるを得なかったのであります。

例えば、島津氏の領内、鹿児島ですね。鹿児島で遊行上人が調達した馬と人は200人です。200人調達しています。しかも、タダで調達しています。それだけ運ぶ荷物があったということでもあります。

この資料は皆同じ形のスタイルです。伝馬手形というのですが、1番最初の234というのを見ていただきます。

馬五十疋江戸より諸国在々諸々に於いてこれを出すべし、とあります。

これは遊行第46代上人へ元禄十年に発行されたものです。西暦でいうと1697年ですね。これは五代将軍綱吉のサインが入っています。つまり馬50匹ということは口取りが必要ですから、50人の口取りが必要ですね。だから50匹、50人は全国どこでも、ただで提出しなさいっていう。これを遊行上人に与えています。これからお話しするのは1番左の237伝馬手形の上人で、一法上人という人です。これも全く同文です。49代の上人へ正徳二年1712年に発行されています。

将軍は六代将軍の徳川家宣ですね。これを持って全国歩くわけです。そうすると大名の方ではその準備をしなければならない。しなければならないっていうと語弊がありますが、するんですよ。

それを具体的に述べますけれども、この伝馬手形をもらうために次のページをご覧ください。

10ページ第5表 遊行49代一法上人幕閣との会見 正徳2年(1712) を見てください。

まず江戸城に参ります。遊行寺を出て2日かかりで江戸まで行きまして、そして1日経ったところで江戸城に参ります。そこで江戸幕府の老中、側用人、寺社奉行にまず挨拶をする。これは上屋敷それぞれの屋敷をですね。回りましてご挨拶する。もちろん手ぶらじゃありません。ちゃんとした贈り物を持っていかなきゃなりません。

そして、その後5月15日ですね。この日には今度は江戸城でご挨拶をします。

同じようなメンバーですね。大老の井伊直興が入っていますが、それ以外は大体同じようなメンバーであります。

翌5月16日にはですね、時宗の筆頭の日輪寺っていうのが浅草にあるんですけども、これが筆頭ですからそこに行って、前上人のですね、一法上人の前の上人の伝馬手形の写しを持って来いということを寺社奉行から連絡があります。

それで、それをそこにありますように提出します。すると5月19日に寺社奉行が將軍の伝馬手形を一法上人に渡しております。

その次の日にですね。早速、遊行上人をはじめとして何人かの僧侶が、老中、寺社奉行にお礼に参ります。こういう手続きを経てですね、先ほどの伝馬朱印というのをもらうわけです。

それをもらったらもう、こっちの勝ちですね。具体的にそれを見たのがその次の表です。

11 ページ 第6表 遊行49代一法上人に対する大名の保護という表です。

国名が書いてありますが具体的にこれ、ずっとこの順に廻っておりますが、これ全てそこそこの地域の大名が、これだけのことを面倒を見たわけです。いくつものタイプがあります。中には藩主に世話にならないのもございます。

反対に1番待遇のいいのはですね、例えば、左の方の14番目を見てください。加賀つまり石川県ですね。大聖寺藩というところ。前田家ですけども、逗留中藩主賄とあります。つまり、大名がこの81人の食事、三度の食事の面倒を全て見ますと、ここの藩主がです。藩主賄っていうのが、いくつの藩があるかというのを数えてみますと、20あります。

全部で71の藩がありますが、20の大名が全ての人の食事の面倒を見ましよう。そこに滞在日数が書いてありますが、結構何日か泊まっているんですよ。

それでも藩主賄というのが20藩ある。それから1番目を見ていただきますと平藩というのがありますね。白米8石それから薪・他と書いてありますけど。この「他」が多いんです。

例えばこの5番目のですね、盛岡の場合、どんなものが必要なのかといいますとですね、これは盛岡藩の資料で分かるんですけども、まずここにありますように、白米が32石、炭と薪とありますね。炭100俵で薪が40間とあるんです。1間が1.80mですから、その40倍ということになるんですが、ちょっとなんか違う。もっと違う単位なのかもしれません。そして餅もあります。それからです

ね、料理人もこちらで手配する。それから医者も手配する。それから白味噌4樽、醤油1樽、漬物大根30本、ごぼう10本、みかん、昆布、野菜。これは数量が書いてありませんが、そういうのがあります。

それから、冬、12月に来ましたから炭100俵ってありますね。これ暖房用だと思います。それからタバコも手配する。それから食器類。81人の食器類とかですね。81人の布団の上下。それから便所を新しくする。一つのお寺ですからね。そこに80人も泊まるとなると、便所も風呂場も作らなければならない。これ全部、藩主が面倒を見る。そういうものが「他」の中身です。

これは、全部そうなんですけど、先乗りの僧侶ってのがいましてね。1週間前に先乗りのお坊さんがやってきてチェックをするんです。これが足りないあれが足りないって色々チェックするんです。

それはその期日までに揃えなければならない。それから一行で81人と申し上げましたけど、なんで81人かと言いますと、ほぼ半分はですね、僧侶です。その僧侶が修行する場としてですね。

遊行上人について廻って毎日勤行をやりますから、それが修行年数にカウントされるのです。大体、他の宗派もそうですけれども16歳で出家します。そして大よそ21年から25年で、21年って言うと37歳ですね。25年だと41歳になります。そうするとですね、今まで黒い衣、墨染の衣を着ていたのをカラーに変えることができる。色付きの衣を着ることができる僧侶の格が一格上がるんですね。

そのためにみんな遊行上人が来た時にくっついてくる。そうでない場合にはどこで修行するかというと、藤沢の遊行寺か、京都の金光寺で修行をしなければならぬ。それは金もかかる。交通費もかかるし、それから食べ物も自分で面倒見なければなりませんから、かなりかかりますけども、遊行上人と一緒に歩けばこれは全部大名が持ってくれますから、金も交通費もかからないという。そういう方法もあったんですね。これは各宗派みんなそうであります。

ちょっと脱線しました。それ以外にですね、藩主仕出有ってというのがあります。これはですね、表の左の方28、29、30、32です。これはですね、藩主仕出しというのは一行が到着した晩の食事の手配。それは仕出しを取りますと、それから出発していく時の朝飯、これも仕出しを取りました。

だからこれは、それほど保護したというわけではありません。そして先ほど申し上げましたけれど、もう1つありまして、手前賄いってというのがあります。

これはですね。右の方の56番目。1001日も泊まっているんです。山城の京都

の金光寺という寺で京都の七条にありました。今ありませんけど、この寺は修行道場なんです。それで、長いこと泊まっています。

そしてなおかつですね、皇居で資格をもらいますので、そのための場所でもあった。そこは手前賄い、つまり自分で面倒を見るわけです。その他にも下の方の69番目と70番目も手前賄いです。

自分で面倒を見る。だから逆に言いますと、お米とかお金とか炭とか薪とかそういうものは提供するけども、料理人は提供しないのです。

だから料理人も連れて行くんですよ。ですから、出家だけじゃなくて俗人がほぼ半分います。それから、熊野権現の神輿があって、その神輿を運ぶような人夫も必要です。

それから、大工さんを連れていきます。畳屋さんも連れていきます。表具屋さんも連れていきます。そういうのがちゃんと一緒に行って不備があった時にはですね、そういう人たちが材料を買ってきて、きちんとやります。ですからそういう俗人も結構多かったのです。大体3対2ぐらいの割にですね。3が僧侶で2がそういう俗人。医者もついていきます。薬屋もついていきます。だから、その遊行上人が祈祷すれば治るっていうわけでもない。医者もいれば薬屋もいるんですから、ちゃんとそのしかるべき科学療法も使うんです。

その旅行の費用は一切大名を持ちというんですから、先ほど1番最初に大した教団じゃないとお思いだった方も多いと思うんですが、大した教団なんですよ。これが江戸時代までであります。

12 ページ第7表 「時衆末寺僧侶転衣並びに参内の様子」をご覧ください。

これは、上人が京都に行って、大僧正の位を天皇から直接もらう。その天皇から直接もらった時の前後の様子であります。転衣は衣の色がカラーになること。

御供参内は、その上人にくっついて行った人たち、有力な坊さんたちですけれども一緒に皇居に入ります。

で、その様子をそこに名前の分かるのだけは書きました。

そしてその綸旨・参内（りんし・さんだい）とあるのはですね、これは先ほど申し上げました衣の色がカラーに変わる人たちが参内します。

それから吹挙状というのは推薦状のことです。

その推薦状を上人に書いてもらって、その綸旨というのは天子の詔（みことのり）つまり辞令ですけども、それをもらって、そしてできれば皇居の中に入れて

ほしいという願いを出す。そういう手続きがありました。

13 ページ 「『遊行日鑑』にみる遊行上人の布教方法と利益」に参ります。

遊行日鑑というのは、それぞれの上人が廻国した時のことを毎日つけた日記であります。これが大量に残っております。私はこの遊行日鑑から今までのいろいろなものを拾い出したのであります。

遊行日鑑に見る布教方法というので、そこにちょっと拾ってみました。

1 番目はですね、賦算・化益（ぶさん・けやく）。化益というのは仏に導くという意味ですから、あまり意味がありませんが、その賦算というのは何かという賦というのは分け与える、という意味です。算というのは御札です。御札を配るということでありまして。そこにありますように1日に朝、昼、夕3回の勤行をやりまします。讃仏・礼拝・読経（さんぶつ・らいはい・どきょう）ですね。これはまづツールで、その後、南無阿弥陀仏決定往生六十万人のお札を遊行上人自ら信者に手渡す。これは現在と来世の安穩を保証する。これさえもらっておけば皆さんは完全に極楽浄土へ行けますし、病気はしないです。この札をもらってください。

2 番目に十念という方法があるんです。

これは、上人が南無阿弥陀仏を10回唱えて信者も復唱する。そうすると生き仏と縁を結ぶことができるので、これも間違いなく極楽に行けます。

3 番目に日課念仏というのがあります。上人と約束して1日何回唱えるかを決めて、それを守ります。そして次回来た時に報告します。

4 番目に名号札（みょうごうふだ）を渡すという遊行上人自筆の南無阿弥陀仏のお札を渡します。書体や規格で値段が違います。

5 番目にお守り、お札。いろんなお札やお守りがあります。

6 番目に加持祈禱と申しまして病気直し・安産祈願・腹帯授与をします。

7 番目回向というのがあります。近親者の菩提供養をしてもらう。生前の逆修供養といって、生きていうちに、お葬式をやってもらう。

8 番目、過去帳入りってのがあります。一遍上人以来書き続けてきた過去帳でこれは国宝になっています。

これに誰でも入れてもらうことができます。これはお金出さなきゃダメですけども、過去帳入りというのがあります。

9 番目が施餓鬼会（せがきえ）これは悪霊を払うために供養する。

10 番目、宝物開帳。これ、一遍聖絵みたいな高級なものは、そう簡単に使え

ませんけども、模写したものがたくさんありますので、それをみんなに見せます。

11 番目、念仏踊りもやります。

12 番目は別時念仏会（べつじねんぶつえ）

13 番目に、熊野権現の神輿があります。

14 ページ 第 8 表 「遊行第 54 代尊祐上人が京都での安産祈願の事例」

簡単に説明します。これは遊行上人第 54 代尊祐が京都で安産祈願した時の事例であります。これで見えていただくとですね、安産祈念というのがありますね。それから、安産御礼っていうのがあるんですね。だから安産祈念として祈禱してもらったら、ちゃんと生まれてきたからお礼に行くという。その両方がありますが、結構、御礼が多いということは、遊行上人の安産祈念も効いたのではないかと、同じ人物が何人か登場します。

例えば 17 番目の人。この千代さんがですね、28 番目にもあります。これは同じ人物で祈願して安産。それから 24 番目の美濃屋たかというのがあります。これ安産祈念。それが 30 番目に安産御礼。こう拾っていきますと相当あります。

15 ページ 第 9 表 「遊行上人第 54 代尊祐による病氣平癒の事例」です。

祈願で病気が治ったかどうかで、これは、そこにもありますように全快御礼っていうのがたくさんあるんですね。とすれば病気が治っているんです。治っているんですけどもどんな方法かという十念とか施餓鬼とか加持祈禱とかありますけども、さっき申し上げましたように医者も連れていきますし、薬屋も連れていきますから治る。ですからあんまり驚かないでください。お礼の品物っていうのはそこにありますけど、大した金額を皆出しています。

16 ページ 第 10 表「遊行上人誓願寺での化益・賦算の人数」を見てください。

これがですね、札配りの実態であります。特にこれは京都の誓願寺というお寺でやった時です。左のところですね。この 1 週間に、7 万 1400 人来ているんです。1 日平均 1 万 200 人来ています。相当な金額でしょこれ？ 1000 円で計算すると、7140 万円ですよ。500 円で計算しても 3570 万円。同じようにこうやって見ていきますとですね、これ左の方がですね、1000 円で計算すると 8430 万、つまり現在我々が生活して病気をしないで済んで、なおかつ来世は極楽に行くとなれば、1000 円ぐらい出しますよね。まあ、皆さんお出しになるかどうか分かり

ませんけども。そうやって計算しても相当な金額がある。これ毎日やるんですよ。こういうお札配りが1日に3回勤行やって、その後も必ずやる。

だからこれで見ただくとその京都だけじゃなくて、下の方が地方でもやっています。それでもそれなりに集まっています。

さて最後になりましたけども、

17 ページ 第 11 表 「遊行 49 代一法上人廻国記録」

ここに記録書とありますのは、今日使いました資料です。これはみんな遊行寺にある資料ですが、活字になっているものがこれだけあります。皆様が不審にお思いになったら、この資料を見てみてください。私が申上げたことの大半はこれに書かれております。

そういうわけで、普通に考えれば遊行寺というのは大したことはないじゃないかという風に考えがちです。けれども江戸時代あるいは中世には権力者がバックアップして、そして大僧正の位を天皇からもらって、そして生き仏になった人が我々のところに訪ねてくる。そういう教団なんですよ。

ところが明治維新になりまして、天皇が大僧正の位を与えるということはありませんでした。明治4年にそれを廃止されました。それから、その統一権力者である将軍もいなくなりました。大名もいなくなりました。

そうすると、遊行廻国と言ってもスポンサーがみんないなくなってしまう。それが遊行寺の現状であります。だから普通のお寺になってしまったということですね。だからこれ特異な教団だから、すごい力を持っていた時期があったけども、それが現在のような教団になって、そしてなおかつですね、明治以降、遊行寺自身も檀家数が非常に少ないんですよ。

それで明治以降、かなり土地を売っています。本来、遊行寺領は2万坪あったんです。あの遊行寺坂の1番上のところまで遊行寺の境内だったんですね。今どのくらいあるかわかりませんが、とでも2万坪なんてなくて、あの辺は民家もありますけど、それも全部遊行寺の土地でそれを、かなり売却されたということで、今は藤沢の藤嶺学園のグラウンドなんかみんな境内の中ですから。そういうのを考えるとですね、江戸時代までの権威というものが、なくなってしまったということはいえるかもしれません。普通のお寺になってしまったということですね。

ですが決して時宗教団っていうのは小さな教団でもなければ経済的に苦しかったわけでもありません。

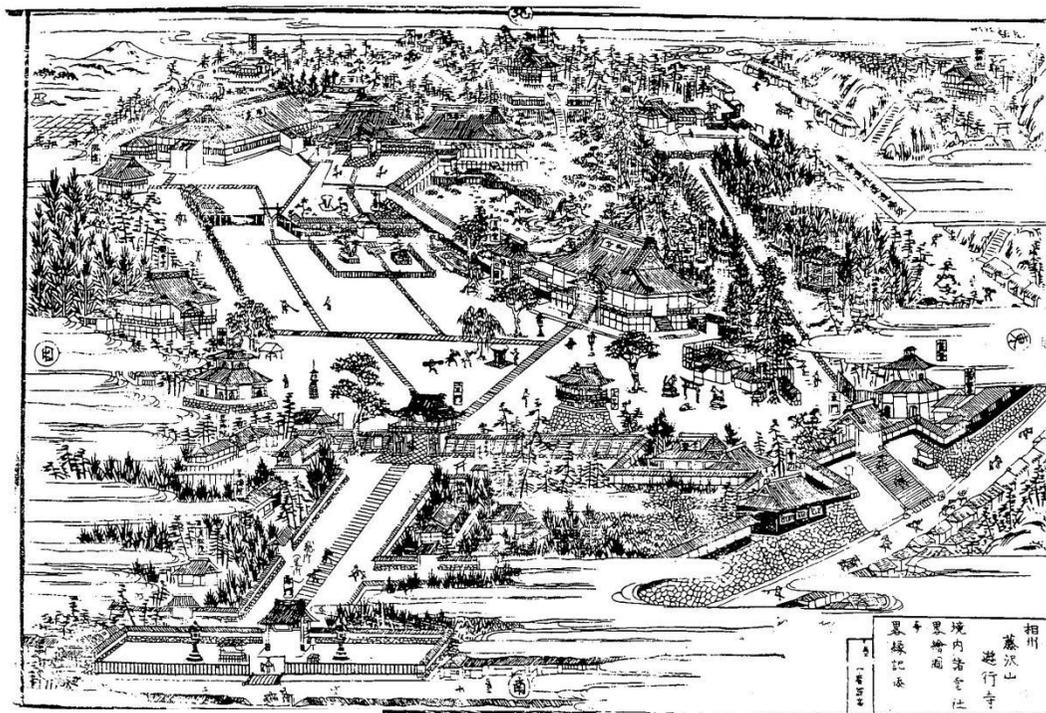
経済的にはですね、今でいう銀行業務的なことをやっておりました。その帳簿が現在、何百冊と残っています。

いつ、だれに、いくら金を貸したかという記録が厚い帳面で残っています。今の所、まだ誰もその研究をしてないのですが、その研究をすれば面白いかなとも思いますが、私にはちょっとその時間がもうないので無理でございます。

ということで、終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(盛大な拍手)



<参考> むかしの遊行寺

遊行寺の歴史 ～生き仏遊行上人～

2025. 11. 8
於鶴沼市民センター

- 1 遊行寺と別時念仏会
 - イ 遊行寺（清浄光寺）の略史 p 1
 - ロ 歳末別時念仏会（一つ火法要） p 2

- 2 日本仏教の中の時宗の存在
 - イ 現代の日本仏教の諸宗派の寺院数 p 3
 - ロ 江戸時代の時宗の寺院数 p 4

- 3 中世の遊行上人と権力者
 - イ 中世の遊行上人の廻国地域 p 5
 - ロ 天皇や将軍との関係 p 6
 - ハ 戦国大名の保護 p 6～7

- 4 近世の遊行上人と幕藩領主
 - イ 近世の遊行上人 p 8
 - ロ 将軍の伝馬朱印状 p 9
 - ハ 一法上人の江戸城登城 p 10
 - ニ 一法上人の廻国と大名の待遇 p 11
 - ホ 一法上人の皇居への参内 p 12

- 5 遊行上人の布教方法と利益
 - イ 布教方法と利益のあらまし p 13
 - ロ 安産祈願とお礼参り p 14
 - ハ 病気平癒の祈願とお礼 p 15
 - ニ 遊行上人の化益・賦算の人数 p 16
 - ホ 本日利用した一法上人の記録類 p 17

む す び

清浄光寺 しょうじょうこうじ 時宗総本山。神奈川県藤沢市西富。一三三五年（正中二）遊行上人四代他阿呑海が、表兄俣野五郎景平の外護を受けて開創したと伝える。はじめ藤沢山清浄光院と称したが、のち清浄光寺と改められた。一般には藤沢道場とよばれた。遊行寺は近代の俗称。開山の呑海が遊行を引退してこの寺に独住したのが前例となって、以後遊行上人閑居の寺となり、この寺に住むと藤沢上人とよばれた。遊行上人は諸国を巡って人々に念仏を勧進するのが本務であり、藤沢上人は清浄光寺にあって全国門末道場の僧尼を統制指導した。そのため清浄光寺は宗門の本山として、その地位を確立する。一五二三年（永正一〇）小田原の北条早雲と三浦道守の戦乱のため金山焼亡、それ以後戦国時代を通じて復興できなかった。江戸初期に遊行三代普光の尽力で本山も宗門も再興されるが、それまでおよそ一世紀近く寺は荒廃したままであった。江戸時代には藤沢が東海道の重要宿駅であつたうえに、遊行上人が徳川氏の殊遇を受けたので寺運もおおいに栄えた。境内に藤沢敵御方供養塔（国史跡）、一三五六年（正平一一延文一）鑄造の梵鐘、遊行寺宝物館がある。行事 一遍忌（九月二一～二四日）、薄念仏会（九月一四日）、歳末別時念仏会（二月一八～二八日）。 ↓歳末別時念仏会 ↓遊行回国 ↓遊行上人

（橋 俊彦）

歳末別時念仏会 さいまつべつじねんぶつえ

時宗総本山清浄光寺（遊行寺）で行なわれる。
薄念仏・開山忌法会とともに当山三大法会の一つ。一遍以来続けられている念仏三昧を修行する重要な行事。この間、「アミひきダはり念仏」という独特の節回しで念仏を合唱する。もとは二三月二四日～三〇日の七日七夜にわたる修行であったが、現在は十一月一八日に始められ、二七日夜の滅灯の儀式、すなわち一ツ火で打ち切り、翌二八日に大御台という儀式で終わる。一ツ火の式は一山の灯火をすべて消し、末法の教えの灯を失ったさまを現わし、その闇の中で火打ち石をもつて、ただ一回で新たに火を切り出す。そして再び明るい世界（念仏の教え）を取り戻すというもの。なお、相模原市の当麻山無量光寺（二月二六日）、神戸の真光寺（二月二七日）、新潟の来迎寺（一月二三～二三日）でも行なわれる。

↓清浄光寺

〈長島尚道〉

第1表 現代の日本仏教諸宗派(末寺200か寺以上表示)

系統	派別	本山	府県名	寺数	
天台宗系	1	天台宗	延暦寺	滋賀	3,244
	2	天台宗真盛宗	西教寺	滋賀	421
		その他21派			692
		小計			4,357
真言宗系	1	高野山真言宗	金剛峰寺	和歌山	3,447
	2	真言宗智山派	智積院	京都	2,850
	3	真言宗豊山派	長谷寺	奈良	2,592
	4	真言宗醍醐派	醍醐寺	京都	886
	5	真言宗御室派	仁和寺	京都	779
	6	真言宗大覚寺派	大覚寺	京都	367
	7	東寺真言宗	東寺	京都	235
	8	真言宗普通寺派	普通寺	香川	221
	9	新義真言宗	根来寺	和歌山	216
		その他45派			895
	小計			12,488	
浄土宗系	1	浄土宗	知恩院	京都	7,028
	2	西山浄土宗	光明寺	京都	604
	3	浄土宗西山禪林寺派	禪林寺	京都	363
	4	浄土宗西山深草派	誓願寺	京都	249
		その他1派			6
	小計			8,250	
浄土真宗系	1	浄土真宗本派本願寺派	西本願寺	京都	10,367
	2	真宗大谷派	東本願寺	京都	8,683
	3	真宗高田派	専修寺	三重	622
	4	真宗興正派	興正寺	京都	479
	5	真宗仏光寺派	仏光寺	京都	373
	6	真宗木辺派	錦織寺	滋賀	205
		その他14派			249
	小計			20,978	
時宗	時宗	清浄光寺	神奈川	412	
融通念仏宗	融通念仏宗	大念仏寺	大阪	356	
臨済宗系	1	臨済宗妙心寺派	妙心寺	京都	3,421
	2	臨済宗南禅寺派	南禅寺	京都	429
	3	臨済宗建長寺派	建長寺	神奈川	407
	4	臨済宗東福寺派	東福寺	京都	362
	5	臨済宗円覚寺派	円覚寺	神奈川	209
		その他15派			1,021
	小計			5,849	
曹洞宗	曹洞宗	永平寺・總持寺	福井・神奈川	14,686	
黄檗宗	黄檗宗	万福寺	京都	459	
日蓮宗系	1	日蓮宗	久遠寺	山梨	4,618
	2	日蓮正宗	大石寺	静岡	408
	3	法華宗本門派	本能寺他2寺	京都他	383
	4	本門仏立宗	宥清寺	京都	269
	5	顕本法華宗	妙満寺	京都	216
		その他20派			741
	小計			6,635	
その他の教団	10派			38	
	総計			74,508	

参考文献

文化庁『宗教年鑑』昭和62年(1987)版

第2表 時宗遊行派寺院分布表(塔頭を含む) (1786年現在)

	国名	寺数(塔頭を含む)	都府県名		国名	寺数(塔頭を含む)	都府県名
1	陸奥	52	岩手・青森・宮城・福島	39	但馬	15	兵庫
2	出羽	19	秋田・山形	40	因幡	1	鳥取
	小計	71	(東北地方)	41	伯耆	2	鳥取
				42	出雲	3	島根
3	下野	44	栃木	43	隠岐	0	島根
4	上野	24	群馬	44	石見	0	島根
5	常陸	71	茨城	45	播磨	0	兵庫
6	下総	19	茨城・千葉	46	美作	0	岡山
7	上総	2	千葉	47	備前	0	岡山
8	安房	0	千葉	48	備中	0	岡山
9	武蔵	41	埼玉・東京・神奈川	49	備後	24	広島
10	相模	37	神奈川	50	安芸	0	広島
	小計	238	(関東地方)	51	周防	2	山口
				52	長門	8	山口
11	伊豆	9	静岡	53	淡路	0	兵庫
12	甲斐	27	山梨		小計	55	(中国地方)
13	信濃	2	長野				
14	駿河	29	静岡	54	阿波	0	徳島
15	遠江	22	静岡	55	讃岐	1	香川
16	三河	1	静岡	56	伊予	3	愛媛
17	美濃	36	岐阜	57	土佐	0	高知
18	飛騨	0	岐阜		小計	4	(四国地方)
19	尾張	1	愛知				
	小計	127	(東海地方)	58	筑前	5	福岡
				59	筑後	0	福岡
20	越後	30	新潟	60	豊前	2	福岡・大分
21	佐渡	15	新潟	61	豊後	1	大分
22	越中	3	富山	62	肥前	0	佐賀・長崎
23	能登	0	石川	63	肥後	2	熊本
24	加賀	1	石川	64	薩摩	41	鹿児島
25	越前	61	福井	65	大隅	10	鹿児島
26	若狭	4	福井	66	日向	42	宮崎
	小計	114	(北陸地方)		小計	103	(九州地方)
					合計	780	71.60%
27	伊勢	4	三重	遊行派以外の時宗寺院数			
28	志摩	0	三重	派別	寺院数	本山	
29	伊賀	0	三重	一向派	119	番場蓮華寺	
30	近江	12	滋賀	四条派	54	京都金蓮寺	
31	大和	0	奈良	当麻派	42	当麻無量光寺	
32	紀伊	2	和歌山	解意派	7	海老ヶ島新善光寺	
33	山城	36	京都	市屋派	2	京都金光寺	
34	攝津	12	大阪・兵庫	霊山派	55	京都正法寺	
35	河内	1	大阪	国阿派	8	京都雙林寺	
36	和泉	1	大阪	王阿派	22	京都新善光寺	
37	丹波	0	兵庫	合計	309	28.40%	
38	丹後	0	京都				
	小計	68	(近畿地方)	総合計	1,089		

第3表 中世の遊行上人廻国地域

歴代	上人名	在位期間	西暦	関東	東北	中部	北陸	中国	九州	四国	畿内	京都	東海	遊行相統地	死没地	歴代 藤沢上人
1	一遍	文永11～正応2	1274～1289	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	熊野	神戸真光寺	
2	真教	正応2～嘉元2	1289～1304	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	播磨極楽浄土寺	当麻無量光寺	
3	智得	嘉元2～元応1	1304～1319	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	相模平塚宿	//	
4	呑海	元応1～正中2	1319～1325	○										因幡西光寺	相模藤沢清浄光寺	1
5	安国	正中2～嘉暦2	1325～1327	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	武蔵芝字宿	相模藤沢清浄光寺	2
6	一鎮	嘉暦2～暦応1	1327～1338	○										越後長福寺	相模藤沢清浄光寺	3
7	託何	暦応1～文和3	1338～1354	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	越前往生院	京都金光寺	
8	渡船	文和3～延文1	1354～1356	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	藤沢道場	相模藤沢清浄光寺	4
9	白木	延文1～貞治6	1356～1367	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	越後称念寺	駿河府中長福寺	
10	元愚	貞治6～永徳1	1367～1381	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	藤沢道場	相模藤沢清浄光寺	5
11	自空	永徳1～嘉慶1	1381～1387	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	尾道常称寺	相模藤沢清浄光寺	6
12	尊観	嘉慶1～応永7	1387～1400	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	三島西福寺	下関尊念寺	
13	尊明	応永8～応永19	1401～1412											藤沢道場	相模藤沢清浄光寺	7
14	太空	応永19～応永24	1412～1417	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	京都金光寺	相模藤沢清浄光寺	8
15	尊恵	応永24～永享1	1417～1429	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	川越常楽寺	京都金光寺	9
16	南要	永享1～永享11	1429～1439	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	藤沢道場	相模藤沢清浄光寺	
17	暉幽	永享12～文正1	1440～1466											越後専称寺	京都金光寺	10
18	如象	文正1～文明3	1467～1471	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	美濃垂井金蓮寺	相模藤沢清浄光寺	11
19	尊皓	文明3～明応3	1471～1494	○										越後称念寺	相模藤沢清浄光寺	
20	一峰	明応4～明応6	1495～1497	○										藤沢道場	相模藤沢清浄光寺	12
21	知蓮	明応6～永正10	1497～1513	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	敦賀西方寺	駿河長善寺	
22	意楽	永正10～永正11	1513～1514	○										駿河長善寺	近江兼台寺	
23	称愚	永正11～永正15	1514～1518											河内通法寺	薩摩浄光明寺	
24	不外	永正15～永正17	1518～1520	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	近江兼台寺	豊後坂西教寺	
25	仏天	永正17～享禄1	1520～1528	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	信濃海野常照寺	越前新善光寺	
26	空達	享禄1～天文5	1528～1536											敦賀西方寺	越後田伏極楽寺	
27	真寂	天文5～天文17	1536～1548	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	越後称念寺	伊予宮床願成寺	
28	遍円	天文18～天文21	1549～1551	○										豊後称名寺	安芸廿日市潮音寺	
29	体光	天文21～永禄5	1552～1562	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	敦賀西方寺	出羽長泉寺	
30	有三	永禄6～永禄11	1563～1573	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	越前岩本成願寺	敦賀西方寺	

(時宗・遊行上人関係)

参考文献 福宜田修然・高野修『遊行・藤沢歴代上人史』 松秀寺)

一八八八 將軍家義持御教書

清淨光寺遷移・遊行金光寺遷移時衆、人夫・馬・輿已下、
諸國上下向事、關之渡、以押手・判形、無其煩可勘過之
旨、所被仰付國之守護人也、若於違犯之在所者、就注進
可處罪科之由、所被仰下也、仍執達如件、

應永廿三年四月三日

(通覽 細川滿元)
沙彌(花押)

當寺

一八九二 後小松上皇院宣

宜被奉祈國家安全・實詐長久者

院宣如此、仍執達如件、

永享二年後十一月二日

權右少辨(花押)

(實)
他阿上人御房

一八九三 將軍家義教御教書

清淨光寺遷移・遊行金光寺遷移時衆人夫・馬・輿已下、諸
國上下向事、關之渡、以印・判形、無其煩、可勘過之旨、
所被仰付國之守護人也、若於違犯在所者、就註進、可處
罪科之由、所仰下也、仍執達如件、

永享八年十二月五日

(細川持之)
右京大夫(花押)

當寺

一九〇五 大內義隆書狀

至分國御遷行之由、預尊書候、諸篇不可有疎略候、隨而、
扇子一柄、引合十帖、絹十疋、令拜領候、恐悅之趣、宜
令披露給候、恐惶謹言、

九月廿八日

(大内)
左京大夫義隆(花押)

進上

一九〇六 今川義元書狀

尊札拜見本望候、仍段子萌黃、杉原十帖贈給候、喜悅存候、隨而沈香并茶椀・盃等進獻之候、聊表賀儀候、厥國御逗留候哉、必期拜顔之時候、恐誠敬白、

十二月十三日 ^(今川) 義元(花押)

尊報

御同宿中

一九〇八 信玄(武田晴信)書狀

定

一 相摸國藤澤 貳百貫

一 同州俣野之内 百貫

右、如此令寄附候、猶關東靜謐之上、御本領之内、重而一所可進置候之趣、可得尊意候、恐惶敬白、

元龜二年 辛未

七月十六日

^(武田晴信) 信玄(花押)

清淨光寺

玉床下

一九一〇 北條氏直判物

道場造榮ニ附而、誰人於領中も用木見當次第、可取之候、仍狀如件、

天正十五年

九月三日

^(北條氏直) (花押)

第4表 近世の歴代遊行上人（32代～58代）

遊行 世代	上人名	在位年代	期間 (年)	相統寺	死去地	没年齢
32	普光	1584～1589	5	日向都於郡光照寺	相模藤沢清浄光寺	84
33	満悟	1589～1612	23	越後北条専称寺	山口善福寺	70
34	燈外	1613～1627	14	江戸日輪寺	相模藤沢清浄光寺	84
35	法爾	1627～1640	13	相模藤沢清浄光寺	甲府一蓮寺	78
36	如短	1641～1645	4	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	69
37	託資	1645～1647	2	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	69
38	卜本	1647～1653	6	相模藤沢清浄光寺	出羽秋田声鉢寺	63
39	慈光	1653～1659	6	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	52
40	樹短	1660～1663	4	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	61
41	独朗	1664～1668	5	相模藤沢清浄光寺	出雲松江信楽寺	51
42	尊任	1668～1683	15	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	67
43	尊真	1685～1691	6	相模藤沢清浄光寺	京都七条金光寺	63
44	尊通	1692～1695	3	相模藤沢清浄光寺	播磨神戸真光寺	56
45	尊遵	1696～1696	6ヵ月	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	70
46	尊証	1697～1700	3	相模藤沢清浄光寺	土佐高知称名寺	57
47	唯称	1703～1707	4	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	63
48	賦国	1707～1711	4	相模藤沢清浄光寺	江戸品川善福寺	56
49	一法	1712～1721	9	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	62
50	快存	1726～1735	9	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	82
51	賦存	1742～1754	12	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	75
52	一海	1757～1761	4	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	79
53	尊如	1769～1776	7	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	68
54	尊祐	1791～1800	9	相模藤沢清浄光寺	相模藤沢清浄光寺	73
55	一空	1812～1815	3	相模藤沢清浄光寺	但馬九日市西光寺	68
56	傾心	1824～1835	11	相模藤沢清浄光寺	越後高田称念寺	77
57	一念	1848～1858	10	相模藤沢清浄光寺	京都七条金光寺	79
58	尊澄	1862～1870	8	相模藤沢清浄光寺	相模国府津蓮台寺	83

参考文献 彌宜田修然・高野修『遊行・藤沢歴代上人史』松秀寺

二三四 (伝馬手形)

□ (伝馬朱印)

馬五拾疋從江戸於諸国在々所々

可出之、是者遊行四十六代之上人江

被下之者也、

(二六九七)

元禄十年五月四日

諸国在々所々中

二三五 (伝馬手形)

□ (伝馬朱印)

馬五拾疋從江戸於諸国在々所々

可出之、是者遊行四十七代之上人江

被下之者也、

(二七〇三)

元禄十六年十月五日

諸国在々所々中

二三六 (伝馬手形)

□ (伝馬朱印)

馬五拾疋從江戸於諸国在々所々

可出之、是者遊行四十八代之上人江

被下之者也、

(二七〇八)

宝永五年七月五日

諸国在々所々中

二三七 (伝馬手形)

□ (伝馬朱印)

馬五拾疋從江戸於諸国在々所々

可出之、是者遊行四十九代之上人江

被下之者也、

(二七二三)

正徳二年五月十九日

諸国在々所々中

第5表 遊行49代一法上人幕閣との会見 正徳2年（1712）

月	日	職格	氏名	藩名	石高	用向
4	23	老中	土屋相模守政直	駿河田中	6.5	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		老中	秋元但馬守喬朝	甲斐谷村	3.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		老中	井上河内守正峰	常陸笠間	5.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		老中	阿部豊後守正喬	武蔵忍	10.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		側用人	間部越前守詮房	相模他	1.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		側用人	本多中務大輔忠良	三河刈屋	5.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		寺社奉行	本多弾正少弼忠晴	三河伊保	1.5	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		寺社奉行	安藤右京亮重行	備中松山	6.5	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		寺社奉行	森川出羽守重興	下総生実	1.0	江戸上屋敷へ挨拶廻り
		寺社奉行	松平相模守近昭	豊後府内	2.1	江戸上屋敷へ挨拶廻り
5	15	大老	井伊掃部頭直興	近江彦根	30.0	江戸城で挨拶
		老中	土屋相模守政直			江戸城で挨拶
		老中	秋元但馬守喬朝			江戸城で挨拶
		老中	井上河内守正峰			江戸城で挨拶
		老中	阿部豊後守正喬			江戸城で挨拶
		若年寄	久世大和守重之	三河吉田	5.0	江戸城で挨拶
		若年寄	大久保長門守教覚	相模他	1.1	江戸城で挨拶
		若年寄	鳥居伊賀守忠救	近江水口	2.0	江戸城で挨拶
		若年寄	水野和泉守忠之	三河岡崎	5.0	江戸城で挨拶
		側用人	間部越前守詮房			江戸城で挨拶
		側用人	本多中務大輔忠良			江戸城で挨拶
		寺社奉行	本多弾正少弼忠晴			江戸城で挨拶
		寺社奉行	安藤右京亮重行			江戸城で挨拶
		寺社奉行	森川出羽守重興			江戸城で挨拶
		寺社奉行	松平相模守近昭			江戸城で挨拶
5	16	時宗触頭日輪寺が前上人の伝馬朱印の写しを寺社奉行本多弾正少弼忠晴に提出				
5	19	將軍の伝馬朱印一法上人宛に出す				
5	20	老中	土屋相模守政直			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		老中	秋元但馬守喬朝			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		老中	井上河内守正峰			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		老中	阿部豊後守正喬			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		寺社奉行	本多弾正少弼忠晴			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		寺社奉行	安藤右京亮重行			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		寺社奉行	森川出羽守重興			伝馬朱印布下につき御礼廻り
		寺社奉行	松平相模守近昭			伝馬朱印布下につき御礼廻り

第6表 遊行49代一法上人に対する大名の保護

	国名	藩名	滞在日数	保護の実態		国名	藩名	滞在日数	保護の実態
1	陸奥	平	11	白米8石・薪・他	36	日向	佐土原	11	逗留中藩主賄
2	陸奥	三春	13	白米8石・薪・炭・他	37	日向	高鍋	3	逗留中藩主賄
3	陸奥	相馬	10	白米8石・薪・炭・他	38	日向	延岡	11	逗留中藩主賄
4	陸奥	仙台	11	白米4石・味噌・薪他	39	豊後	臼杵	6	金14.3両
5	陸奥	盛岡	111	白米32石・炭・薪他	40	伊予	大洲	9	藩主仕出有
6	陸奥	八戸	7	白米4石・炭・薪他	41	伊予	松山	53	逗留中藩主賄
7	陸奥	弘前	14	白米14石・炭・薪他	42	伊予	西条	8	藩主仕出有
8	出羽	秋田	26	白米15石・炭・薪他	43	土佐	高知	22	金14.3両
9	出羽	庄内	17	白米20石・味噌・薪他	44	阿波	徳島	21	金16両・藩主仕出有
10	越後	村上	10	白米5石・薪他	45	讃岐	高松	10	藩主仕出有
11	越後	長岡	12	白米4石	46	讃岐	丸亀	10	藩主仕出有
12	越中	富山	42	白米8石・薪・炭他	47	備後	福山	14	白米12石・薪他
13	加賀	金沢	97	白米60石・金83両他	48	備中	高梁	11	逗留中藩主賄
14	加賀	大聖寺	2	逗留中藩主賄	49	美作	津山	12	逗留中藩主賄
15	越前	大野	8	白米8石・薪他	50	備前	岡山	26	逗留中藩主賄・金14.3両
16	越前	福井	10	逗留中藩主賄	51	播磨	赤穂	8	逗留中藩主賄・金2.2両
17	若狭	小浜	11	白米8石・炭・薪他	52	播磨	竜野	7	逗留中藩主賄
18	丹後	田辺	10	白米6石・炭・薪他	53	播磨	姫路	20	逗留中藩主賄
19	丹後	宮津	9	白米8石・炭・薪他	54	播磨	明石	11	逗留中藩主賄
20	但馬	出石	9	白米6石・炭・薪他	55	播磨	尼崎	8	白米2石・薪・味噌他
21	但馬	豊岡	7	白米4石・炭・薪他	56	山城	京都	1001	金光寺(手前賄)
22	因幡	鳥取	32	逗留中藩主賄	57	和泉	岸和田	12	白米4石・炭・薪他
23	安芸	廣島	31	白米20石・炭・薪他	58	紀伊	和歌山	22	逗留中藩主賄(熊野14日)
24	石見	浜田	5	白米3石・味噌・醤油他	59	大和	高取	13	白米4石・炭・薪他
25	石見	津和野	6	白米8石・味噌・醤油他	60	大和	郡山	17	白米4石・炭・薪他
26	長門	山口	69	逗留中藩主賄	61	伊勢	久居	7	白米2石・薪・炭他
27	豊前	小倉	17	金7.2両	62	志摩	鳥羽	5	白米2石・薪・炭他
28	筑前	福岡	31	金14.3両 藩主仕出有	63	伊勢	亀山	8	白米2石・薪・炭他
29	肥前	唐津	12	藩主仕出有	64	伊勢	桑名	14	白米4石・薪・炭他
30	肥前	佐賀	22	金21.5両 藩主仕出有	65	美濃	大垣	15	白米5石・金20両他
31	筑後	久留米	18	逗留中藩主賄・金14.3両	66	三河	挙母	9	米・薪他
32	筑後	柳川	9	藩主仕出有・金10.8両	67	三河	刈屋	10	白米2石・薪他
33	肥後	熊本	50	逗留中藩主賄・金21.5両	68	三河	岡崎	12	白米2石・薪他
34	薩摩	鹿児島	54	逗留中藩主賄	69	三河	西尾	13	白米2石・薪他(手前賄)
35	日向	飫肥	14	金7.2両	70	遠江	浜松	66	白米2石(手前賄)
					71	甲斐	黒駒	43	逗留中藩主賄(金200両)

参考文献 『遊行日鑑』第1巻 角川書店

第7表 時宗末寺僧侶転衣並参内の様子

	元号	西暦	月日	国名	地名	末寺名	僧侶名	備考
1	享保 1	1716	9. 2	上野	岩松	青蓮寺		御供参内
2				下野	佐野	称念寺		御供参内
3				相模	温水	専念寺	了音	御供参内
4				伊予		応現寺	貞山	御供参内
5				山城	東山	迎称寺		御供参内
6				上野	秋妻	光林寺		御供参内
7				下野	真岡	長蓮寺	東訓	御供参内
8				越後	高田	称念寺	慈門	御供参内
9				上野	館林	長福寺		御供参内
10				出羽	秋田	声躰寺	弁石	御供参内
11				相模	平塚	教善寺	弁空	御供参内
12			9. 22	越前	岩本	成願寺	秀問	吹挙状・繪旨・参内願
13				越前	池田	大願寺	哲応	吹挙状・繪旨・参内願
14				常陸	北条	無量院	心量	吹挙状・繪旨・参内願
15				下総	佐倉	海隣寺	泰道	吹挙状・繪旨・参内願
16				相模	戸塚	親縁寺	弁応	吹挙状・繪旨・参内願
17			10. 26	紀伊	和歌山	安養寺		参内
18				越前	岩本	成願寺	秀問	参内
19				越前	池田	大願寺	哲応	参内
20	享保 2	1717	5. 22	佐渡	相川	大願寺		吹挙状・繪旨・参内
21			6. 22	越前	岩本	成願寺		吹挙状・繪旨・参内
22				常陸	海老嶋	道源寺		吹挙状・繪旨
23			8. 25	越前	宮谷	興徳寺	廓音	吹挙状・繪旨
24	享保 3	1718	2. 19	下野	茂木	蓮華寺		吹挙状・繪旨
25			5. 24	上野	岩松	青蓮寺	素鑑	吹挙状・繪旨
26	享保 4	1719	2. 7	下総	中居指	満願寺		吹挙状・繪旨

参考文献 圭室文雄『遊行日鑑』第1巻
高野修『遊行・在京日鑑』第1巻

『遊行日鑑』にみる遊行上人の布教方法と利益

- 1 賦算・化益 一日朝・昼・夕方三回の勤行（讃仏・礼拝・読経）を行う、その後南無阿弥陀仏（決定往生六十万人）のお札を遊行上人自ら信者に渡す
現世と来世の安穩を保証する
- 2 十念の授与 上人が南無阿弥陀仏を十回唱え、信者も復唱し縁を結ぶ
- 3 日課念仏 上人と信者の間で一日に念仏を何回唱えるか、約束する
- 4 名号札を渡す 遊行上人自筆の南無阿弥陀仏のお札を渡す 書体・規格により値段が異なる、草名号（草書体）・行名号（行書体） この他木版で印刷された札 大・中・小あり
- 5 お守り・お札 矢除・病除・疱瘡除・安産守・虫除け守・海陸安全守など
- 6 加持・祈祷 病氣平癒・安産祈願・腹帯授与
- 7 回向 近親者の菩提供養・生前の逆修供養
- 8 過去帳入り 一遍上人以来歴代上人が書き継いできた過去帳に上人が書き入れる
必ず極楽往生が出来ると考えられた。
- 9 施餓鬼会 家の祖霊を含む諸精霊を供養する
- 10 宝物開帳 宗祖一遍上人の生涯を記した「一遍聖絵」を絵解きする その他の宝物を展観する
- 11 念仏踊り 上人を中心として念仏踊りを適時行う
- 12 別時念仏会 毎年年末一週間念仏供養会を行う
- 13 熊野権現の神輿 この他衣類・雨具・仏具など携行

第8表 遊行 54代尊祐上人京都での安産祈願の事例

	年月日	名前	祈願の内容		年月日	名前	祈願の内容
		寛政 8 (1796)		32	9.15	かな 22歳	安産祈念
1	3.15	小堀縫殿	安産祈念	33	9.17	銭屋 さと	安産御礼
		寛政 9 (1797)		34	9.25	□こ 35歳	安産祈念
2	6.4	おもだか屋 きく	安産祈念	35	9.25	寅年みつ	安産祈念
3	7.8	堺屋 妙清	安産御礼	36	10.11	帯屋 のぶ	安産御礼
4	閏7.15	平松屋 とみ	安産祈念	37	10.13	はな 29歳	安産祈念
5	9.26	智勇尼取次ぎ	安産御礼	38	11.11	柗屋 はん	安産御礼
6	10.14	智勇尼取次ぎ	安産御礼	39	11.26	新屋 まつ	安産御礼
7	11.26	井筒屋 まき	安産祈念	40	12.6	玉屋 まつ	安産御礼
		寛政10 (1798)		41	12.6	むめ	安産祈念
8	1.9	西六条 家中	安産祈念	42	12.6	はな	安産祈念
9	1.21	加賀屋 きよ	安産祈念	43	12.23	丑年女来3月出産	安産祈念
10	3.5	おうの	安産祈念			寛政12 (1800)	
11	5.28	銭屋 いせ	安産御礼	44	1.9	中川屋利助 いそ	安産御礼
12	8.21	八重	安産御礼	45	1.12	みはる 40歳	安産祈念
13	8.23	山形屋 とき	安産祈念	46	1.22	河内屋 のぶ	安産祈念
14	8.23	玉屋 くめ	安産御礼	47	2.8	ちせ 23歳	安産祈念
15	11.21	三井 すみ	安産祈念	48	2.11	白粉屋 はや	安産祈念
		寛政11 (1799)		49	2.12	渡辺屋 しげ	安産御礼
16	3.16	近江屋 新兵衛	安産御礼	50	2.12	かめ	安産祈念
17	3.16	中川屋内 ちよ	安産祈念	51	2.14	渡辺屋 しげ	安産御礼
18	3.16	松本屋 権太郎妻しう	安産祈念	52	2.15	よせ 25歳	安産祈念
19	6.2	丹波屋 とい	安産祈念	53	2.15	平松屋 とみ	安産祈念
20	6.8	田辺 たき	安産祈念	54	2.19	神崎屋 八重	安産祈念
21	6.8	本□ かう	安産祈念	55	2.22	帯屋 源兵衛妻	安産御礼
22	6.16	大坂屋藤七	安産祈念	56	2.27	山形屋 平兵衛妻	安産御礼
23	7.2	寅年女	安産御礼	57	2.28	井筒屋 いそ	安産祈念
24	7.10	美濃屋 たか	安産祈念	58	3.10	井筒屋喜兵衛内 よそ	安産御礼
25	8.13	八幡屋善四郎内 26歳	安産御礼	59	3.12	経師屋 もよ	安産御礼
26	8.14	勝村屋 みよ	安産御礼	60	3.12	柏屋 りせ	安産御礼
27	8.15	中川屋利助内 いそ	安産祈念	61	3.14	深草 勘左衛門	安産御礼
28	8.15	中川屋利助内 千代	安産御礼	62	3.17	ひさ 23歳	安産祈念
29	8.21	柏屋 りせ	安産祈念	63	3.20	津国屋 みか	安産祈念
30	9.11	美濃屋 たか	安産御礼	64	3.30	ひで	安産祈念
31	9.11	八幡屋 □□	安産祈念	65	4.10	みよ 22歳	安産祈念

参考文献 高野修編『遊行・在京日鑑』第6～7巻

第9表 遊行 54代尊祐上人による病氣平癒の事例

年号	月日	地域	屋号	名前	病氣の種類	祈願の方法	お礼の品物
寛政 8(1796)	4.6	京都	小堀	ぬい	病氣平癒祈念		
	4.10	京都	小堀	ぬい	病氣全快御礼		蒸菓子1折
寛政 9(1797)	閏7.15	京都	桔梗屋	いよ	病氣全快御礼	十念	銀1封
	8.18	京都		堀田鉄吉	病氣平癒祈念	加持祈禱・十念	錢1貫文
	8.19	京都		堀田鉄吉	病氣平癒祈念	放生会式	鳩・雀・鰻居く・錢3貫文
	8.20	京都		堀田鉄吉	病氣平癒祈念	施餓鬼	饅頭40・餅40・金1両
	8.29	京都	澤潟屋さく	倅音吉	病氣全快御礼	十念	麦1箱
	10.25	京都	□□□□		病氣全快御礼	加持祈禱・十念	菓子1袋
	12.17	京都	木屋町播磨屋	六兵衛倅3歳	痘瘡除祈念		
寛政10(1798)	1.2	京都		堀田鉄吉	大病に付き祈念	祈禱・神勅の礼	
	4.18	京都	松屋	嘉兵衛妻	病氣全快御礼	加持祈禱・十念	くす1袋
	5.8	京都	宇治屋	源兵衛	病氣全快御礼	祈禱・十念	錢1貫文
	6.20	京都	大和屋	久兵衛	病氣全快御礼		錢100文
	8.3	京都	近江屋	市兵衛妻	病氣全快御礼	十念	白銀1封
	8.15	京都	菱屋	かう	病氣平癒祈念		線香1把
	8.21	京都	市田屋	富三郎	病氣全快御礼	十念	白銀1封
	9.17	京都		八重	病氣全快御礼		錢100文
	9.21	京都	本堂道心	海浄	病氣全快御礼		
	11.12	京都	松屋	中兵衛	病氣平癒祈念	祈禱	錢200文
寛政11(1799)	2.23	京都	尾張屋	久六	病氣全快御礼		錢200文・砂糖
	2.27	京都	井筒屋	次兵衛	病氣平癒祈念		白銀1封
	3.15	京都	中堂島屋	そよ	病氣全快御礼	十念	昆布
	4.29	京都	市田屋	おさと	病氣全快御礼		粽・白銀1封
	6.14	京都	大黒屋	藤七	病氣平癒祈念		白銀1封
	6.14	京都	会下	大寿	病氣全快御礼		
	6.17	京都	大坂屋	藤七	病氣平癒祈念		白銀1封
	6.18	京都	八幡屋	すか	病氣平癒祈念		白銀1封
	6.18	京都	大坂屋	藤七	病氣平癒祈念		白銀1封

第10表 遊行上人 誓願寺での化益・賦算の人数

寛政8年(1796) 第54代尊祐上人

月日	天気	人数
4.19	晴天	3,100
4.20	晴天	7,300
4.21	晴天	10,300
4.22	快晴	10,600
4.23	晴天	13,800
4.24	晴天	14,800
4.25	晴天	11,500
合計		71,400
1日平均人数		10,200

文政10年(1827) 第56代傾心上人

月日	天気	人数
8.29	晴天	4,870
8.30	吉祥	12,640
9.01	晴天	15,420
9.02	天気	16,150
9.03	天気能	16,000
9.04	天気能	16,120
9.05	雨天	3,100
合計		84,300
1日平均人数		12,043

参考文献 高野修編『遊行・在京日鑑』第6巻
称名寺

高野修編『遊行・在京日鑑』第12巻
称名寺

○ 歴代上人のうち多人数に対する化益・賦算

- ① 51代賦存は1744年 岩城(福島県)城西寺で10日間で36000人 1日平均 3600人
- ② 53代尊如は1775年 京都誓願寺で7日間で45000人 1日平均 6429人
- ③ 56代傾心は1825年 石見(島根県)益田万福寺で7日間で35000人
1日平均 5000人
- ④ 57代一念は1849年 北海道函館称名寺で8日間で16700人 1日平均 2088人
松前城下正行寺で11日間で27000人 1日平均 2455人

第11表 遊行49代一法上人廻国記録

元号	年	西暦	月	廻国地	記録書	ページ
正徳	2	1712	3~12	藤沢~南部寺林	『遊行日鑑』第1巻	29~67
正徳	3	1713	1~8	寺林~越後妻有	『遊行日鑑』第1巻	68~106
正徳	3	1713	9~12	妻有~加賀金沢	『遊行日鑑』第1巻	107~119
正徳	4	1714	1~12	金沢~周防山口	『遊行日鑑』第1巻	120~164
正徳	5	1715	1~12	山口~伊予奥谷	『遊行日鑑』第1巻	165~208
享保	1	1716	1~11	奥谷~京都	『遊行日鑑』第1巻	209~254
享保	2	1717	1~12	京都滞在	『遊行・在京日鑑』第1巻	1~32
享保	3	1718	1~12	京都滞在	『遊行・在京日鑑』第1巻	33~62
享保	4	1719	1	京都滞在	『遊行・在京日鑑』第1巻	62~63
享保	4	1719	1~7	京都~和歌山	『遊行日鑑』第1巻	255~282
享保	4	1719	7~12	和歌山~尾張萱津	『遊行日鑑』第1巻	283~315
享保	4	1719	10	萱津光明寺~挙母	『時宗近世史料集』第1集	43~48
享保	5	1720	1~12	萱津~甲斐黒駒	『遊行日鑑』第1巻	316~361
享保	6	1721	1~12	黒駒~藤沢	『遊行日鑑』第1巻	362~419

圭室文雄編『遊行日鑑』第1巻 角川書店
 高野修編『遊行・在京日鑑』第1巻 称名寺仏教研究所
 高野修編『時宗近世史料集』第1巻 白 金松秀寺

質疑応答

司会

ここで質問をお受けいたします。皆さんお聞きになりたいことのある方は挙手をお願いします。-----ハイ、どうぞ。

質問

俳句協会の神谷と申します。いくつか質問させていただきます。

1つは、芸能について、あの例えば謡曲中には遊行衆が結構出てきます。ですから、場所の背景の中にも遊行寺の名がいくつかあります。ということで、その芸能と時宗との繋がりは何か、あるのでしょうか？

答

遊行上人の中にはですね、歌人もいますし、それから俳句の達人もおります。そういう部分的な形ではおります。けれども、代々継承していったというような形はないと思います。それから、あの俳諧やなんかをあのお寺でやる。会場としてやるというような、そういうことはございます。

質問

影響力といいますかね。日本全国を常にどこかの場所で80人の人を抱えて廻っていたということで、やっぱり存在感が非常に明治以前はあったということですか。

答

はい、そうですね。

他の教団は、例えば奈良や京都においでになっても大僧正に直接ちょっと会いたいといったってとても会えないですね。何段階かこうあって、なかなか普通の人間が行ったところで会えません。が、遊行上人の場合には逆に向こうから来てくれるわけですから。

だから、あの自分の菩提寺の宗派と関係なく自由に会えるという。それからこちらの要求を受け入れてくる。さっきちょっと薬のことを申し上げましたけども、それぞれの仏教教団というのは、それぞれの本山で薬草を使って薬を作っております。

例えば高野山ならば「陀羅尼助」、曹洞宗のお寺でしたら京都に道正庵「神仙解毒万病円」という薬を1万8000ある全国の末寺に売り捌くとかですね。

で、そういうのが入ってくるチャンスがあります。先ほどご質問にありましたように、いわゆるその芸能とか、それから文人とかいうような人たちが入ってくる。それはその教団そのものが大きければ大きいほど入ってきます。

それから遊行寺は特にすすめ、東海道の街道筋にありますから、ちょっといい方が悪いのですが、貧乏絵描きの人が描いた絵やなんかたくさん残ってます。で、同じように、それは京都でも奈良でも、各宗の本山でもですね。今となっては貴重ですけども、当時大した絵描きではなかった人の絵もたくさん残っています。だからそういう繋がり、文人たちも繋がっていたと考えていいんじゃないでしょうか？

質問

明治以降になって、スポンサーがいなくなった、というのは、ちょっと驚いています。あの、明治の初期に廃仏毀釈の運動がありました。その影響でやっぱりお寺の数が減ったってことは？

答

それはあります。無住とか檀家のない寺、これらは全部潰します。そして、その神道国教化になりますから、神仏を離すという形で神を残して仏教を潰すという動きであります。これは、神道系国学者たちが中心になっているんですね。

そういう思想が展開していきます。それから、薩長が明治政府の政権を取った段階です。薩摩も長州も土佐も肥前はちょっと違うんですけども、いずれも仏教弾圧してるんです。それをつまみ、薩長土肥が政権を取って各県に薩長土肥の侍たちが役人として入るんです。その時にその仏教を排斥する運動というのはそういうところから出てきます。

ですから、薩摩や長州や土佐と同じように仏教を排斥していこうよという形。それは「神仏分離資料」というのが現在、国会図書館に残っておりますけれども、その資料などを見ますと、もう全国至るところそうですね。

今度はお寺側としては、どうやってそれを逃れるかですが、神社になっちゃう寺もあるんです。例えばこの辺りでは、江ノ島ですね。江ノ島は、元々、真言宗の寺だったんです。ですから、宿坊も岩本院、上の坊、下の坊と3つあった。3つともですね、東寺真言宗の総本山である京都の東寺の末寺なのです。

それが明治維新になった時に全部そういう人たちは還俗して俗人になって神主

になったんです。その中で岩本院だけは生き残っていますね。生き残ったっていうのは、ちょっと語弊がありますけど。

それで岩本院も下の坊も妻帯だったんです。真言宗の坊さんなのに妻や子供がいたんです。何故かっていうと江戸からやってくるお客さんがたくさんいますから、その接待のためには奥さんも子供も労働力として必要ですから、そういう人たちも兄弟たちも妻帯していた。それが明治維新になった段階でみんな神主になっちゃう。

そういう流れは寒川神社もそうです。寒川神社も高野山の末寺が4つあったんです。それが4つあったうちの2つ、寺の坊さんたちは坊さんをやめて神主に転ずるんです。1つの寺は外に追い出された西善院で、その寺だけは現在真言宗の寺として残っています。後の2つの寺は潰されてしまいました。そういう形で、先にご指摘がありましたように、その神仏分離政策と明治政府の政策の中で、実際、僧侶であったのが神主に変わります。

有名な例は奈良の興福寺ですね。春日神社というのは興福寺の坊さんが神式のいろんな儀式もやっていて、春日神社の神人といって神の人って書くんですけども、これは下級神官なんです。ですから、明治維新になった時に神仏分離の政策の中で、春日神社と興福寺は明治政府に狙われて、興福寺の坊さんは変われといわれ、神主になった。一時的に神主になるんですよ。ところが今度は興福寺のお寺の方が無住になってしまうので、その間に仏像だのが全部盗まれてしまって外国に売却されて、ボストン美術館だとかフランスのギメ美術館には600体の仏像があります。300種類600体で、これ日本の博物館にはそんなにないですよ。そういう形ですもんねえ、やられましたから奈良や京都の大きな寺の仏像はそういう形で流出したということもいえると思います。それも神仏分離の政策の影響だと思えます。

質問

最後に1つだけ。高尚なお話の中で、急に下世話な質問で申し訳ないのですが、あの江戸時代から落語の中にですね、遊行寺を題材にした「鈴振り」という艶笑噺がございましてね。先ほど遊行寺は藤沢宿をリードしたということでしたので、我々その飯盛女といえますね。遊女をしていたというのがありますので、遊行寺の僧侶、飯盛りも何か機能していたといえますかね。そういうことも、やっておられたということがございましてでしょうか。

答

飯盛女はもちろんおりました。これは、どこの宿場にもいましたですね。だから藤沢もその例外ではもちろんありませんでした。ただ、そういう記録というのは現在ほとんど残っていません。藤沢宿は何回も火災にあっていますので、藤沢宿の資料、あの江戸時代の資料を大々的に持っている家はないんですよ。

藤沢史誌の調査をやりましたけども、1番困ったのは宿場の資料がないことでした。それが遊行寺の方にはですね、あの遊行日鑑ってのがありまして、遊行寺の住職が代々書き残したものが江戸時代の中期から明治の初めまで残っています。

200年分ぐらいは残っています。それはすでに藤沢の文書館で活字にしておりますので、その中から丹念に拾えば宿場との関係は分かるという風に思います。

質問

あの、今回の件で予習したんですけど、インターネットでみますと、時宗は「踊る念仏によって浄土宗から枝別れした」と、ありました。この辺をちょっとご説明ください。

答

うーん。念仏踊りっていうのは確かに一遍の時からやっております。ただ、一緒になって踊るとですね、その悦に浸るということで、身近なところに遊行上人が降りてきて踊るといふ、その念仏踊りをする時にですね。

今で言うところのタップダンスみたいなもんなんですけども。この音のする板を持って歩いてるんですよ。上人はその板の上に乗って念仏踊りをする。そうするとタップダンスみたいな形で、非常に軽やかに鳴るので、それはあの共同幻想で、その念仏踊りをすることによって、みんながこう1つの信仰に一体化するという論理は、最近の新興宗教にも活用されております。そういう意味で、あの遊行上人が割に早い時期に取り入れたというのは布教するにあたっては非常に都合が良かったと考えられます。

長野県のです、佐久郡で踊ったのが最初ですけど、それは例えば福島県にジャンガラ念仏ってのありますけど、それと少し形は変わりますが、同じ念仏を唱えながら踊るといふ点は同じです。

そういう形で地域の1つの何といいますかね、民謡と踊りと繋がったような形で残っているところもあります。ちょっと正確じゃないかも知れません。

質問

大変面白い話。ありがとうございます。で、1つお聞きしたいのは、中世の前より手厚い保護も受けていて、近世になって、さらに全国を回るようになって、これは、そこに果たしてどういう意味があるのかですね。

これだけ布教に対して手厚い保護をしてるっていうのは一体他と比べて、幕府は何を考えたのかってこと。それからもう1つは全国を行脚している時に複数人も当たるのは、これは1つは当然負担のためもあるんですが、その他に何か目的があったのでしょうか？

答

非常に難しいご質問ですけれども。そうですね、あの1つですね、そのヒントになるかどうか分かりませんが、遊行上人が全国を廻って帰ってきました時にですね。幕府に報告をしてるんです。

で、この幕府に報告するってことはどういうことかと言いますと、例えば飢饉とか水害とかありますと、幕府は各藩に対してこれだけの金を出せとか、これだけの人間を江戸に出せとか、江戸城の修復のためにこれだけ出せるか、東照宮を建てるのにこれだけ金を出すかというようなことはあるんです。そういうような場合に便利なのは、その報告ですね。

同時代を遊行上人が廻っていて、そしてそれぞれの藩の様子分かるわけですね。凶作で大変だから金出せないってと行ってみたら、すごく米は取れていたとか、そういう報告を幕府に出すために日記を作っているんです。

ですから、その日記を幕府に持っていかれると困る大名もあるわけですね。そういう意味で、あの遊行上人はスパイだったという説もあるんです。だけど、その遊行上人としてはこういう所でこういう事がありました、ということは、その報告義務としてやらなければならないですね。それだけ、幕府のおかげで廻国できましたので、それはきちんと報告書ですから、そういう形で流れていくということもありましたね。

答えにならないかもしれませんが、そういう流れも1つあるんだろうという風に思います。だから各大名たちも、「敬して遠ざける」といういい方をしますが、尊敬してですね、なるべく早く領内を出て行っていただきたい。そういう気持ちはありました。しかし、そうでない藩もありました。例えば廃仏大名の典型ですけども岡山藩の池田などはですね、接待する必要ないって突っぱねるんですね。その時に遊行上人の側では幕府のこういう証文を持ってきているんだ。だ

から、ちゃんと手配せよという。そういうやり取りをしているところもあります。そういう藩は他にもいくつかあります。例えば、御三家ですね。名古屋と紀州と水戸。この3藩はあまり親切じゃなかった。つまりほとんど接待もしないし、金も出さない、人も出さない、ただ、通過するのは構わない。だから、そういうところには泊まらないです。泊まっても何も出ませんからね。そういう所も、全くなかったわけではありません。

質問

明治維新にですね、廃仏毀釈した理由と、その背景は何でしょうか。

答

色々ありますけども、例えば神社・神官を復活させて、古代の日本の信仰の神道を中心に据えるという。

江戸時代に仏教保護政策っていうのはいろんな形で取ってるわけですよ。寺領を与えたり、それからもう1つは現在、皆さんがお寺と檀家の関係を持ってらっしゃる、これは江戸時代からなんですよ。

なぜ、寺との関係を持っているか。別に信仰はしてないけど、とにかくうちの菩提寺はここだという風にありますよね。それは江戸時代キリシタンを禁止するために寺受け証文というのを寺の住職に書かせたからなのです。

つまり寺の住職が、この人はうちの檀家でキリスト教徒ではありません、という証文を書いてくれないと戸籍を作れない。宗門人別帖という、今の戸籍ですね。

その時には必ず寺の住職がキリスト教徒でないという証文にハンコを押してくれないとダメだから、寺との関係というのは好き嫌いは別にして持っていなければならなかったのです。

だから檀家の側から選択の余地はないんですよ。そこの村に日蓮宗の寺しかなかったら、そこと繋がらなければならない。浄土宗の寺であつたらそれと繋がらなければならない。そういう形で檀家制度というのがあって、それで、寺に対する保護政策を幕府が取ってきた。キリシタンを入れないためにですね。ですから、そういう形で江戸時代は保ってきたんですけど、明治維新になった段階でキリスト教は許されたんですね。

だから明治5年から戸籍に寺が立ち合わなくなる。それまでは毎年戸籍作っています、寺がハンコ押さない限りは戸籍に入れない。戸籍に入れないのは帳面から外されて差別される。そういう形になりますから、なんとかキリシタンじゃな

いということを保証してもらわなければならない。だから皆さんが特別なそういう信仰を持っている方は別かもしれませんが、私もそうですけども、その昔から寺が決まっていた。今でもそのお寺の繋がりがあります。けども、じゃあ信仰を持っているのかって言うと特別持っているわけではないんですね。で、明治維新になってその神道国教化というような形になってきました。

それはどういうことかと言いますと、今までの徳川幕府が仏教中心政策を取ってきて、その幕府を潰したわけですから、それに変わるものとして神道それからもう1つは幕末に「ええじゃないか運動」ってのが盛んになって特に関西には強かった。それは何かというと「伊勢の御札が降った」ということですね。

伊勢信仰というのが、そこで出てくる。それと、さらに我々の先祖たちは例外なく伊勢にお参りしているんです。伊勢参りというのを村単位で講を作って若い人を必ず村で送る。その広い意味で世の中を知る。そのために伊勢だけじゃなくて、高野山へも行くし、奈良や京都も回って帰ってくる、修学旅行みたいなもんでね。それを若い人に村が金を出してやっていた。そういう伊勢講というのがあったわけです。それを利用しながら一方で明治政府としては神道を強化しようという動きがありましたから、それに乗せていく。神道と言っても、江戸時代の神道は伊勢は農業神として外宮にお参りする。

ですから、天照大神の内宮の方にお参りするのではないんです。みんな我々の先祖たちが行ったのは外宮の農業神ですね。そこで御札もらって帰ってくる。

話はちょっと変わりますが、江戸時代に最も神道で強かったのは京都の吉田です。吉田神道。この吉田神道っていうのは江戸幕府の公認の神道でした。

寛文5年（1665年）に神主法度というのが出来まして、それ以降、神主は必ず吉田で資格を取ることになった。吉田神道ってのはどこにあるかという、今の京都大学があるところです。旧制第三高等学校の寮歌『紅もゆる』に「月こそかかれ吉田山」という歌詞がありますが、その吉田山が吉田神道の中心でした。

明治政府はそれを伊勢神道に変えるんです。ですから、この辺の、明治初年の庄屋さんですね。この辺では名主とってました。

そういうところの日記を見ますと伊勢の札を明治政府は購入させています。そのお金を寒川神社とか、それから大山神社の神主が中心になって集めて県庁に届けています。県庁から、そのお札の代金を伊勢神宮に送るという。明治4年になって官国幣社といいまして、官幣大社、国幣大社、中社、小社など、そういう形で全国の神社の格付けがされる、それが1つの流れになって仏教排斥運動が起こ

っているのです。

だから江戸時代は神仏集合なんですよ。庶民にとってはどっちでもいいわけです。それを神道に変えていこうという流れが明治になって出てきた。そういうことであります。

司会

よろしいでしょうか？ よろしければこの辺で終わりにしたいと思います。
圭室先生、どうも有難うございました。

(盛大な拍手、しばし鳴り止まず)

たまむろ ふみお

圭室文雄先生紹介

たまむろたいじょう

1935年 歴史学者で僧侶の圭室諦成氏の長男として藤沢町鶴沼に生まれる。

以来、鶴沼に居住、生粋の鶴沼人。

日本の歴史学者、明治大学名誉教授。専門は近世宗教史。神奈川県地方史も手がける。遊行上人の『遊行日願』に携わり遊行寺とのかかわりも深い。

鶴沼を語る会会員。

書籍： 葬式と檀家、日本仏教史：近世、神仏分離、図説日本仏教の歴史：江戸時代、江戸時代の遊行聖など多数。

※

日 時： 2025年11月8日(土) 午後1時30分～3時30分

会 場： 鶴沼市民センターホール

入場者： 156人(市民センター調べ)

司 会： 竹内広弥

配付資料： 圭室文雄先生作成

収 録： AI録音自動活字化ソフト、オリンパス DP-10 大川久

編集/写真： 竹内広弥、岡田哲明

出 典： P4 一遍聖絵 一遍上人像写真 遊行寺 HP より

「遊行寺の歴史」聴講者アンケート

2025年11月8日（土）

鶴沼市民センター実施

参加人数 156人

アンケート回収 85枚

参加者年代

30代以下 0人 40代 1人 50代 7人 60代 30人
70代 57人 80代 48人 不明 13人

居住地

鶴沼地区内 86人 地区外 53人 不明 17人

周知方法

チラシ 50人 広報 41人 市HP 6人 その他 47人
不明 12人

従来参加

あり 47人 なし 38人 不明 71人

職業

勤労者 12人 無職 46人 その他 22人 不明 76人

本日の満足度

非常に満足 47人 満足 32人 どちらともいえない 2人
不明 75人

<感想>

- ・卒業後、はじめて圭室先生の講義なつかしく拝聴しました。お元気でご活躍のご様子、うれしかったです。ありがとうございました。
- ・具体的な経済内容があってよかったです。
- ・大変勉強になりました。有難うございました。
- ・たいへんわかりやすいお話でした。圭室先生のお話が聴けてとても満足です。
- ・大変興味深く拝聴しました。ありがとうございました。
- ・大変参考！！勉強に成りました。有難う御座いました。
- ・鶴沼の歴史がわかった。
- ・地元の遊行寺のことが詳しくわかりました。

- ・大変興味深く拝聴しました。
- ・期待した内容とはちがっていたが、内容は興味深く面白かった。
- ・勉強になった。
- ・遊行寺についての体系的なお話が聞けて、大変良かった。予想以上に得るものが多かったです。ありがとうございました。
- ・圭室先生ならではの資料の読み込みによる、遊行上人にまつわる史実の面白さや、昔の人々から受継がれている文化に触れ、先生の楽しく知的な解説に、久しぶりに大学の授業を受けたような充足感を覚え、感謝します。
- ・藤沢の遊行寺の歴史は知ることがなかったので大変興味深くうかがいました。貴重な講座だったと思います。
- ・なかなか興味深かった。こんな研究をやられておもしろかった。すごいなあーと思いました。
- ・よい整然としたプリント。本当きき易かった!!
- ・時宗が幕府から保護されていたことを初めて知ることができました。ありがとうございました。圭室先生のわかりやすい講義、大変ためになりました。時宗遊行寺の歴史に思いをはせてお参りをしたいと思います。
- ・僧の金勘定がおもしろかった。
- ・先生のお話がとても面白かったです。
- ・圭室先生あいかわらずおもしろい、お元気そうで何よりです。とくに近世の遊行寺はご専門で勉強になりました。
- ・遊行寺の流れがわかり良かった。
- ・有名なお寺の歴史がわかってとても有意義でした。
- ・実際的な資料でリアルに布教活動も扱った。お話が上手。遊行寺と呼ぶ意味が全国の宗派寺を回って布教活動を行うことに困っていることを知った。安産祈願が布教活動の一つであったことが興味深かった。
- ・色々勉強になりました。
- ・遊行寺の布教の歴史を教えてくださいました。
- ・時宗の理解が深まった。
- ・遊行寺とはそういう寺だったのかと興味深く聞きました。
- ・遊行寺の歴史を詳しく教えてくださいまして感謝。
- ・遊行寺の歴史を中世～詳しく学ぶ事が出来た事が満足で奥深さを学ぶ事が出来ました。遊行寺の近くに住んでいて、毎年何度も参拝したり庭を楽しませてい

ただきましたが、今日の様な歴史の重さを学ぶ事が出来、今後の参りが重く感じられると思います。先生の深い深い知識に驚かされました。よい先生の講義に大満足と良い知識を得られました。感謝です。

- ・楽しくきくことができました。
- ・実態の詳細なお話が興味深い。
- ・資料を用いての説明に説得力がある。大僧正がむこうから会いに来てくれるという時宗の特別さが当時の人々に受け入れられたと思った。
- ・遊行寺の歴史がよく理解できた。大変興味深かった。
- ・遊行上人の全国行脚の詳細や経済的利益との関係について理解を深める事ができた。徳川家がなぜ時宗の支持を始めたかについて、疑問が残る。
- ・遊行寺の歴史が知れてよかった。
- ・わかりやすく遊行寺の歴史を講演されて知らなかったことが、資料をみてわかった。
- ・とても良かった。
- ・身近な遊行寺について知らないことばかりでした。楽しいお話をありがとうございました。
- ・全く知らなかった領域の話で勉強になりました。ありがとうございました。
- ・遊行寺の近世の様子がよくわかりました。
- ・詳細にわたる話でよく理解できました。
- ・遊行寺の歴史と待遇が良くわかった。参加者が熱心に聞いていて他の会のように居眠りの人もいなかった。一遍の行動もよくわかった。
- ・90才という年齢にも拘らず、頭脳明晰で判りやすく良かった。
- ・さすが長く研究されてきた方のお話で興味深く拝聴しました。（最初はどうかと…）
- ・すばらしい公演（講演）に感謝です。
- ・鶴沼に住んでいながら何十年も遊行寺を訪れていません。本日のお話を聴き、先生の説明を思い出しながら行こうと思いました。
- ・遊行寺というお寺がどういう寺であったのか、資料を通してていねいに教えてくださいととても勉強になりました。
- ・資料的な詳しい話で興味深かった。仏教上の教義的意義も聞きたく思いました。
- ・遊行寺のお寺ですが初めての事ばかりで勉強になりました。圭室先生のわかりやすい説明で、また聞きたいと思います。

- ・圭室先生ならではのレベルの高い講義でした。
- ・興味深く拝聴しました。
- ・時宗について知らない話は興味深かった。
- ・おもしろい内容だった。興味深い話が聞けて良かった。
- ・遊行日鑑、とてもおもしろかったです。今まで知らなかった遊行寺を知ることができました。普通のお寺に戻ってしまった遊行寺に行って、昔の遊行寺を思いうかべてみます。
- ・遊行寺の正式名称を始め、新たな学びを得ることができました。
- ・わかりやすかった。上人の行動の実態にふれられた。
- ・実態がおもしろかった。全く知らないお話でしたので興味深く聴かせていただきました。
- ・遊行寺について中世、近世と順にしっかり学べた（初めて）。新しい知見を沢山、沢山いただきました。圭室先生ありがとうございました。
- ・当時の状況を細かく説明してくださりととても参考になりました。楽しく聴講できました。
- ・普段見られない資料は面白かったのですが…遊行上人とは何か、全国を回って何をどうやって広めたのか肝心なところが解らなかつた。タイトルと内容が合っていないのでは？最初の目次の説明は要らなかつたと思う。時間配分がおかしい。
- ・知らないことや、誤解していたことなどたくさんあって、とても面白かった。
- ・レジユメの纏め方が良かった。圭室文雄先生の説明とレジユメが判りやすく良かった。
- ・時宗についてよくわかる説明でした。
- ・非常に貴重な話が聞けてありがとうございました。時宗、遊行寺の系統だった講義は参考になりました。
- ・遊行寺（時宗）の歴史を親しみ易く講義してくださり、楽しく聴講できました。非常に興味深い講演会でした。面白かったです。
- ・すばらしい。感謝します。
- ・少々ムズカシカッタです。
- ・本編、とても興味深くおもしろかった。質問コーナーさらに深まりました。明治で日本の宗教が変わった。はいぶつきしゃくも知れておもしろかったです。
- ・詳しい歴史を初めて知ることができてよかつた。大変力ある集団だつたことを

初めて知り得て参考になった。

- ・ 鶴沼を深堀りしてください。
- ・ わかりやすい説明でかなり理解できた。90分では短すぎる。ありがとうございました。

<今後の講座の希望等>

- ・ 芸能の流れなど。
- ・ 近現代の鶴沼の話を聞きたい。
- ・ 鎌倉や藤沢にかかわる歴史。
- ・ 藤沢について、知りたがりやとして！たのしみ。
- ・ 鶴沼の歴史とくに前近代について。
- ・ 鶴沼の発展の歴史。
- ・ 歴史講座。古代から現代まで。時事講座。パレスチナ問題など。
- ・ 「鶴沼」が別荘地として発展した過程。
- ・ 歴史が好きです。
- ・ 鶴沼関連のお話楽しみにしています。
- ・ もう少し、お寺の話をご案内ください。
- ・ 希望します（鶴沼界限に関する事）
- ・ 藤沢の歴史を詳しく聴講する機会をお願いします。
- ・ 江の島と鶴沼との関係（社会的、政治的）の講演をしてくださるとたいへんうれしい。
- ・ また近々やって欲しい。遊行寺の今日の講義又やってほしい。
- ・ 住みたくなる町の魅力とは。
- ・ 仏像について。
- ・ 機会を多く作ってほしい。老人社会で余裕時間あり。
- ・ 近代文学の歴史的背景を含めて学びたい。
- ・ 鶴沼地区と北条氏との関係についての歴史講演会を開いてほしい。
- ・ 江の島やこのあたりの地理や地層のはなし。
- ・ 滅びる前の大庭城の役割。
- ・ 音楽等の講演をお願いします。
- ・ 吾妻鑑、義経記など鶴沼、片瀬、江の島が記載されている古典について。

注：<感想><今後の希望>内容は原文のまま

医師「福田良平」を語る～石山美和子さん

令和7年4月の例会で鶴沼での最初の医師と言われる福田良平氏について孫の石山美和子さんに語ってもらった。石山美和子さんは現在88歳、今も鶴沼海岸の医院跡の自宅で元気にお過ごしである。

石山さんは話を始める前置きとして次のように述べている。「良平が亡くなりましたのは昭和15年でございまして、私がそれこそ満で4歳の時に亡くなっております。私にとりましてはもう本当に優しく可愛がってくれて大事にしてくれたおじい様でした。私の中の記憶ではそういう風にしか覚えておりません。

これからお話しいたしますことは母、光代からの聞き伝えでして、その点をお含みの上聞いていただきたいと思います」



祖父を語る石山美和子さん

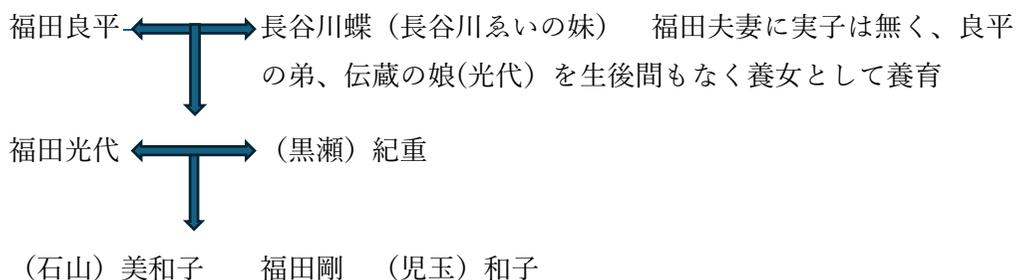


福田良平氏と孫の石山美和子さん

福田良平氏の医院ははじめ「鶴沼海浜医院」と称した。鶴沼海岸商店街の有田商店から東屋跡に向かう道の正面にあった。藤沢医史によると福田良平氏が鶴沼における最初の医師だと記している。しかし、石山さんによると「元々建物というのは祖父が建てたのではなくて、あの前にお医者様がいらしたそうです。その方が亡くなったのか廃業なさってしまいました。あの頃は東屋には結核で長期滞在なさって療養なさっている方とか、それから別荘がポツポツできてきて、そこで療養しているというような方たちが多かった

のでしょうね。で、やはり医者がないというのは困るということで呼ばれたようです」と語っている。

福田氏を鶴沼に呼んだというのが東屋の女将、長谷川ゑいである。福田氏の妻、長谷川蝶は東屋の女将、長谷川ゑいの妹である。福田医院と旅館東屋は親戚関係にあると言える。関係図を示すと下記のようになる。



福田良平氏は明治 10（1877）年生まれ、埼玉県熊谷市出身である。日露戦争時に陸軍 3 等軍医になり、陸軍戸山病院に勤務した。藤沢医史では福田氏は開院後、鶴沼で初めて自転車を持ち、これを往診にも使ったと記している。

石山美和子さんは当時の福田医師の忙しさを次のように述べている。「あの頃は医薬分業でございませぬから医院の中でお薬も出しておりましたね。往診する時は、祖父は人力車で往診していたそうです。

お医者様も少なかったっていうこともあるでしょうけれど、朝早く 4 時頃から人が並んでいるような状態でした。遠方からの患者さ



福田医師と書生たち 中央は石山美和子さんの母、福田光代さん

んをリアカーに乗せて布団敷いて連れてきたという方が随分多かったそうです。

朝4時からでも非常に忙しくて、あの頃はもう夜中だって往診、電話かかってくれば往診でした」

当時の様子を有田商店の有田祐一氏は医院から商店街まで患者の列ができていたと述べている。医院は東屋と現在の国分邸と接し、肥え上げ道までの広い土地を有していた。しかし大正12（1923）年の関東大震災で他の家々と同様に倒壊した。

石山さんは語る。「大震災の時に家は全壊しました。津波が1メートルぐらい来たそうです。有田商店ぐらいまで津波が来たと言っておりました。家の者たちは倒れた家からおばあさんを引っ張り出し、戸板で運んだり、病人だった叔父を連れ出したりしました。現在の小田急線の向こう側に松山があったそうで、そこで何日か蚊帳を釣って余震に耐えたという話を聞いております。今の横浜銀行や郵便局のあたりに3、4軒の小さな夏の貸家が震災でもつぶれずに残っていたそうです。なにしろ病人と怪我人がものすごかったのでお医者さんを早く入れて手当てをして欲しいということで町の方々が貸家に福田一家を優先的に入れて下さいました。その後、早く医院を再建しないと患者さんに迷惑だということで『福田医院』として再開いたしました」

福田医師は再建にあたって再度浸水しないように土地を1メートルほどかさ上げした。今でもその土地が周囲より高いのが見て取れる。昭和に入り、福田氏は病気をしたこともあり、仕事の量を減らした。そして趣味の菊づくりに時間を割くようになった。

当時の様子を石山さんは次のように語っている。「庭で菊の懸崖を大々的にやっておりました。秋になると園遊会のように町の方々や東京、横浜から人々がみえて大変賑わったそうです。芽から育てて菊の懸崖を庭に飾って皆さんに喜んでいただいたと聞いております。昭和10年頃までは菊づくりをやっていたとのこと。饅頭屋さんから菓子をとって皆さんにお配りしてお茶もだしていたとのこと。わたくしが生まれた頃に菊づくりをやめたそうです。シナ事変が起きてだんだん贅沢ができなくなったのだと思います。祖父にとって昭和の初めぐらいが一番いい時期だったのではないのでしょうか」

福田氏の菊づくりは当時の神奈川名所絵図にも鶴沼、福田医院の菊として紹介



菊の懸崖の前で 福田夫妻

されている。福田氏は、昭和 15 年に肺壞疽で亡くなった。ちょうどそのころ旅館東屋も廃業している。

石山さんは最後に次のように述べている。「祖父は本真寺の颯田本真尼(日本のマザーテレサと呼ばれ、国内の被災地で慈善活動を行った)に共感し、敬愛しておりまして、一生懸命お手伝いをさせていただいたようです。熊谷の墓も全部整理して本真寺に納めさせていただきました」

今、福田氏は本真寺に眠る。医師としての跡取りがいなかったためその後、藤内医院、川澄医院と変遷していった。

(構成・文：大川 久)

創立 50 周年記念 2025 年 大磯史跡めぐり



吉田茂邸



明治記念大磯邸園 旧大隈重信別邸・旧古河別邸及び陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸

大磯史跡めぐりに参加して

創立 50 周年記念行事の一つとして、マイクロバスを使っての大磯史跡めぐりを 2025 年 5 月 27 日（火）に実施した。参加者は 11 名。鶴沼市民センターを午前 10 時に出発。行き先は大磯。吉田茂邸と明治記念大磯邸園内の陸奥宗光邸・旧大隈重信邸の見学および、その庭園を散策した。予定通り午後 3 時に出発点の鶴沼市民センターに帰着した。

吉田邸・明治記念大磯邸園を見学

◆吉田茂邸

吉田茂はもともと大磯出身で儒学者小笠原東陽が創設した耕余塾出身です。以前、当会会員小林政夫先生のご案内で小笠原東陽の墓（藤沢市羽鳥 3-2 汲田墓地内）を訪ねたことがありました。耕余塾の場所は羽鳥 3-10-30 で碑があります。

なお、net で見ると小笠原東陽を顕彰する「白石記念館」（藤沢市辻堂元町 1-4-11）があるそうです。近くですから見学に行ってもいいですね。

さて吉田邸ですが昭和 22 年ころ建てられた応接間棟に昭和 30 年代に数寄屋建築の大家吉田五十八の設計で建てられた新館は、どの部屋からも富士山か海が見えるように設計されていました。平成 21 年 3 月 22 日原因不明の火災で焼失、平成 29 年 4 月 1 日再建され大磯町郷土資料館別館として一般公開されました。

◆明治記念大磯邸園

（陸奥宗光邸・旧古河別邸） 陸奥宗光邸は明治 28 年病氣療養のために建てられ宗光没後、次男潤吉が養子にいった先の古河家所有となりました。建物は関東大震災で一部倒壊。現在の建物は昭和 5 年に建てられたものといえます。

（旧大隈重信邸・旧古河別邸） 大隈重信が明治 30 年に購入したものです。明治 34 年に古河鋳業の古河市兵衛に売却され、以後、増改築され現在の姿に。屋根は銅板とアルミ板に葺き替えられています。古河鋳業はわが国初の公害問題、足尾鋳毒事件を引き起した会社であることは皆様ご存じの通りです。

庭園は、手入れが行き届いていて巨木、名木が生茂り、気持ちのいい散策でした。ここのトイレはオリンピック競技場を設計した隈研吾の設計で外壁は細竹が縦格子状に並べられ、休憩所（四阿）かと思いました。

◆国道を挟んで反対側にある県立城山公園も行って見たかったです。ここにある大磯町郷土資料館本館もなかなか素敵な建築で、30 年ほど前、茅ヶ崎にお住ま

いの桐朋音楽大学教授岡田伸夫（ヴィオラ）、名倉淑子（ヴァイオリン）ご夫妻のミニコンサートがあり、娘がピアノ伴奏を仰せつかって行ったことがあり、再訪出来ればと思っていたので少々残念でした。

世話人の田中さん・大川さん・伊東さん、ご苦労様でした。（岡田 哲明）

大磯の吉田邸と大隈・陸奥邸を訪ねて

今回の見学会はバスを仕立てての大磯吉田邸と大隈・陸奥邸の見学である。参加者は11人と年々少なくなる傾向にあるが、寒くもなく暑くもなく年寄りには優しい天気模様で楽しい見学会となった。バスや弁当の手配に尽力された田中・伊東両氏に感謝申し上げたい。また、事前に下見をしたことによりスムーズに動けたし、現地の駐車やボランティアガイドの手続きも円滑にできた。

鶴沼も別荘地として開発されたが、大磯は違った雰囲気醸し出している。鶴沼は療養の人や文人、芸術家が集まる別荘地であったが、大磯は明治以来の政治家や財閥の別荘地が多いという違いがあるのかもしれない。政治家にとって東京から大磯までの距離感がリラックスできるということかもしれない。県立公園としてよく整備され、歴史を学び散策を楽しむ絶好の環境である。（大川 久）

先の戦争を思い出す

今回訪れた、旧吉田邸、旧陸奥宗光別邸、旧大隈重信別邸は背後の湘南平から連なる尾根が海に接する位置にある。湘南平のテレビ塔・展望台に上るとこの地の別荘地としての立地のよさに納得がゆく。テレビ塔があるくらいであるから、ここからは湘南一带を見渡すことができる。厚木方面の街並み（相模野台地）、大山、箱根の山々、伊豆半島、相模湾、近くには江ノ島、その先に三浦半島、房総半島が見える。訪れた各邸宅の敷地は広く、鶴沼の様に平らではないので海につながるなだらかな敷地からは、富士、箱根の山々が近くに見え、大磯の海も間近に見えたはずだ。

吉田茂については何も知らないが、旧吉田邸を見ていると戦争とは無縁であったかのような邸を構え、国民の生活とはかけ離れた感覚で国政を司る政治家であったのではないかという印象を受けてしまう。

ここに来て考えるのは戦争のことである。開戦は避けられないものであったとしても、もう少しまい戦い方があったのではないか。

真珠湾、ミッドウェー方面には行かず、南方を固めていれば、本土爆撃は、半

年は遅れ、原爆が広島、長崎に投下される事態にはならなかったのではないか。たとえ海軍は力尽きても、（決して望むわけではないが）本土決戦を戦い抜き無条件降伏を避ける戦力は残っていたのではないか。

戦中、戦後の国民は、教えられているほど悲惨で貧しかったのかどうか。敗戦で失ったものは何なのか。いまさらではあるが疑問は尽きない。なるべく冷静に諦めずに考えてみたい。（永井 純一）

修復された旧吉田邸を訪ねて

旧吉田茂邸は以前焼失した後見学したときには、もっと地味な印象でしたが、今回すべて修復された邸宅は内装の設えも外観もすべて豪華でした。豪華だけではなく、階段の一段の高さが通常の半分ぐらいしかなく脚が戸惑ってしまうほどでした。途中で躓いてしまったのですが、転ばずに過ぎて高齢者への配慮と感心いたしました。後半のお隣の明治政界の要人たちの邸宅では今でもだれかが住んでいるかのようなふるい雰囲気修復されていて、庭に向く歪んだ古い硝子窓から新緑がすけて、昔の硝子にも心惹かれました。

庭といえば吉田邸の薔薇園には「プリンセスミチコ」「マリアカラス」などの名前のついた薔薇には目を奪われる華やかさ。すこし上ると、庭師さんたちが梅の実の収穫をしていて策に青梅が盛られていました。梅の実をみていたら、梅の花の時期にはいい香りの華を楽しめたのだと思いました。

どんよりした空から雨は落ちてきませんでしたし萌える新緑の美しさも充分感じることができてすべてに感謝です。（原 雅子）

50周年記念 史跡めぐりに参加して

50周年記念旅行として、大磯の吉田茂邸と明治記念公園が選ばれて、5月の良き日に小型バスを貸切り、一行11名で政界の奥座敷 大磯へ出かけた

吉田茂といえば昭和天皇、マッカーサー元帥の信頼も厚く、終戦で荒れ果てた日本の復興をリードした宰相であり、彼が私邸として、又、別荘として、ときには私設迎賓館として外国の要人をまねいても恥ずかしくないように設計された由緒ある建物である。

平成21年（2009年）3月22日に火災で焼失、現存する建物は、平安29年（2017年）に焼失した旧吉田茂邸を5億円の寄付をあつめて復元したものである。それにしても使われている建築材料は一つ一つ吟味された材料が使われてお

り、我々庶民の邸宅とは全然異なる。

旧吉田茂邸は戦前に吉田五十八の設計によりアールデコの要素をとり入れ内部の空間を広く見せる為、部屋の柱をなるべく見せない造りとなっており、近代数寄屋建築と呼ばれているそうです。吉田茂氏も自慢の住まいであったのであろう。さらに、これらの特徴をガイドさんがていねいに説明して頂き理解することができた。ガイドなしでは全然解らず見学の価値も半分以下に落ちていたと思う。

午後は、やはりガイド付きで、明治記念大磯庭園の旧大隈重信別邸と陸奥宗光別邸跡、旧古河別邸を見学。明治の政界の大物政治家の生活を回顧した両別邸で感心したのは、当時の最先端材料である大きな透明度の高いガラス戸がふんだんに使われていた。しかしガラスの歪みが見られた。

終わりに今回の企画を計画、お世話いただいた幹事の方々に謝意を表します。ありがとうございました。（西村 望）

マイクロバスでの往復と現地でのガイド付きは助かった

創立50周年記念行事のひとつ大磯史跡めぐりツアーが、5月末の運営委員会日に開催され、参加した。見学先は旧吉田茂邸、明治記念大磯邸園―旧大隈重信別邸/旧陸奥宗光別邸の2か所。

高齢になると自分ではなかなか旅行、見学などに出かけなくなっていたが、気心の知れた会員の皆さんと一緒に見学ツアーに参加できた。

前以て下見にも行ってくださった幹事の大川、田中、伊東の3氏にはお礼申し上げたい。今回は鶴沼市民センターからマイクロバスに乘車、同センターに戻り解散と、至れり尽くせりの楽なツアーであった。もう少し多くの会員の参加があればなお良かったと思う。

参加者の皆さんも感じたことであろうが、今回は現地のガイドをお願いしたことで、見学した史跡をより深く理解し記憶に残るものになったのは良かった。

鶴沼を語る会では27年ほど前、吉田邸（焼失する前で当時は非公開だった）見学ツアーを行ったことがあるが、説明なしだったので各部屋を通り過ぎるだけで記憶は薄れている。それにこの時は、皆若く、今回の2ヶ所のほか、三井邸跡の城山公園、島崎藤村邸、エリザベスサンダーホームなどもめぐった。しかも大磯駅集合、大磯駅解散であった。

そのような経験があったため、出かける前は今回は訪問先が少ないのではないかと思ったが、とんでもない、帰宅してどっと疲れを感じてしまった。「歳には

勝てないなあ」と思った次第である。（有田 裕一）

今回の史跡めぐりの幹事として

本年2月14日の例会で弊社創立50周年の記念行事の一環として大磯の旧吉田茂邸及び明治記念大磯邸園（旧大隈重信邸、旧陸奥宗光邸）を巡るバスツアー開催が決定され、大川、伊東、田中の3名が実行委員として任命されました。私は世話役としてバス会社とのスケジュール調整、弁当の手配及び訪問施設との折衝を主に担当しましたが、本番の5月27日（火）より約1か月前の4月28日（月）に現場の下見をしようということになり、伊東さんの車で行きました。生憎、旧吉田邸の休館日が毎週月曜日でしたので中に入ることはできなかったのですが、管理室に職員が出勤していて駐車場予約、ガイド手配等の打ち合わせすることができました。また、当初予定していた庭園内の飲食も禁止とのことで管理室を使用させて頂くことになり、案内のガイドも吉田邸だけでなく大隈邸でもお願いすることにしました。そして、当日は天気にも恵まれツアーも滞りなく完遂されてよかったです。大川さん、伊東さん、お疲れ様でした。なお、私は5月5日に帯状疱疹を罹患し既に2か月半超経ちましたが未だ顔面左半分のしびれがひどく当日は何とか参加しましたが猛暑の影響もあり体調不良も続いており6月、7月の例会及び運営委員会も参加できずにいます。

首から上の帯状疱疹は対応いかんでは命にも関わるとのことで当面は慎重に対処しようと思います。（田中 雄一）

創立50周年記念行事―「大磯史跡めぐり」無事終了

いつも海沿いの西湘バイパスを車で走るが、その脇のこんもり緑に覆われたところに今回の目的地・吉田茂邸と明治記念大磯邸園があった。吉田邸の庭の奥には吉田茂の銅像が立ち、相模湾が一望のうちに眺められた。建物自体焼失した後のものなのであまり興味なかったが、外交上の舞台となった各部屋の役割が面白かった。吉田茂が邸内から富士山を眺めるのが好きだったとガイドさんの説明。当日は曇り空だったが、幸い西空に富士山の姿があった。鏑門近くの管理室で幹事さんが用意してくれた和食弁当を楽しんだ。

吉田茂邸を辞しまイクロバスで明治記念大磯邸園へ。大磯インターから西湘バイパスに乗り一周する形で次の目的地へ。古い建物に心癒され、広々とした庭園を散策、愉快的なガイドさんの説明におもわず笑顔になった。（竹内 広弥）

「鶴沼を語る会 50年のあゆみ」 市民センターまつりで展示

今年の第49回「鶴沼地区市民センターまつり」は10月18日(土曜日)、19日(日曜日)に開催され、好天にも恵まれ盛況だった。

鶴沼を語る会は「50年のあゆみ」をテーマに、これまでの50年にわたる活動を展示した。会の創立の経緯、活動年表に続き公民館まつりでの展示様子、講演会・座談会、対外協力、史跡めぐり、メディアで紹介された数々の出来事、会誌創刊号から30号までの手書きの表紙絵など写真をメインに展示した。

創立から20年目位までの写真は殆ど残っておらず、展示材料の収集には苦労した。幸い文字による活動の記録はしっかり残されており会誌『鶴沼』の創刊号からの記事は昔の出来事を調べるのに大いに役立った。(写真・文 竹内広弥)



題字は刀根恵子会員による揮毫



初日に鈴木市長も来場



展示作業協力の会員の皆さん



鈴木市長、山口センター長を交えて



パネル4枚(720cm)に「50年のあゆみ」を展示



数十年にわたる公民館まつり、講演会、対外協力、プロジェクト活動を写真で展示

メディアで紹介

2025年(令和7年)9月15日(月)

毎 日 新 聞

「鶴沼を語る会」50周年 藤沢

藤沢市南部にある鶴沼地区の歴史・文化を調査研究している団体「鶴沼を語る会」が今年11月に設立50周年を迎える。公民館のサークル活動として発足し、ゆかりのある作家や画家を紹介したり、会誌を発行したりしてきた。市内でも半世紀続くサークルは数えるほどしかなく、会員は「住みやすい鶴沼が好きで調査も苦にならない。今後も地道に活動を続けていきたい」と話している。

地元愛 調査楽しい

ゆかりの作家など 歴史文化を研究



竹内代表(前列中央)ら鶴沼を語る会の運営委員会のメンバー。藤沢市鶴沼海岸の鶴沼市民センターで

で結成された。当時は女性中心のサークル活動がほとんどだったことから、「男性も参加しやすいものを」と声が上ががり、地域の商店主らが中心になって設

立した。最初の頃の会員数は10人程度。会報も手書きの簡単な作りで、それほど活発ではなかったという。

だが次第に郷土史や地域の文化に関心のある会員の輪が広がった。2005年ごろには

は会員が70人近くにわたり、活動も多岐にわたるようになった。

鶴沼海岸の商店街で創業110年以上になる「有田商店」を経営する有田裕一さん(88)は、会が発足してまもなくからの会員だ。「地域の巨木巡りをしたり、玉石垣を調査したりして、どれも興味深かった。地元に住んでいるからこそ知りたいという強い思いを持って、会員は活動してきた」と振り返る。

会では、鶴沼に住んだり滞在したりして、ゆかりのある作家や画家らを調査研究のテーマとしてきた。1992年と2012年には作家の芥川龍之介を調べ、公民館まつりで鶴沼との関わりを発表。芥川は大正時代末に鶴沼で暮らし、その際に書かれた小説や滞在中の生活を細かく調べた結果は、市民らに好評だったという。

同会の竹内広弥代表(82)は「会員のほとんどが在住者で、鶴沼が大好きな人の集まり。会員の平均年齢も高くなり、若い人に参加してもらって今後も積極的に活動したい」と話している。

会では10月に鶴沼市民センターのまつりで、創立50周年を記念するこれまでの歩みを展示する予定。11月には記念講演会も企画している。【澤圭一郎】

「鵜沼を語る会」活動の記録

(令和6年12月～令和7年12月)

令和6年

12月例会

- 12月10日(火) 10時～12時 学習室① 15名出席
・会誌『鵜沼』124号配付 130部作成 会員/贈呈者へ便送/郵送
・新年会2025 出席者確認 会費¥3,500を集める

12月運営委員会

- 12月24日(火) 10時～12時 第1談話室 7名出席
・新年会－2024年1月9日(火) さかな家 出席者12名最終確認

令和7年

1月例会・新年会

- 1月14日(火) 11時30分～13時30分 12名出席
例会日を新年会に充て、藤沢・「さかな家」で開催。
今回もビンゴゲームを楽しんだ。

1月運営委員会

- 1月28日(火) 10時～12時 第1談話室 7名出席
・鵜沼海浜医院について石山さんに話してもらう(大川会員折衝)

2月例会

- 2月11日(火・祝日) 10時～12時 学習室① 10名出席
・新年会報告 ・明年度の創立50周年記念行事について話し合った

2月運営委員会

- 2月25日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

3月例会

- 3月11日(火) 10時～12時 学習室① 14名出席

3月運営委員会

- 3月25日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席
・大磯史跡バスツアー 14名が参加希望 幹事：田中/大川/伊東会員

4月例会

- 4月8日(水) 10時～12時 第1談話室 13名出席

- ・第 39 回定期総会について ・ 50 周年記念行事について一大磯史跡バスツアーを 5/27 に行う。鶴沼市民センター 10 時発-15 時戻り 参加費：¥2,000 (見学料込) 弁当を用意する
 - ・記念行事として 10 月の市民センターまつりで「50 年のあゆみ」を展示、11 月に記念講演「遊行寺の歴史」(講師：圭室文雄氏) を予定。
- <お話> 鶴沼地区で最初の医院といわれる「鶴沼海浜医院」について
 明治 39 年に当医院を立ち上げた福田良平氏のお孫さん・石山美和子さんにお話しいただいた。

4 月運営委員会

- 4 月 29 日(火・祝日) 10 時~12 時 第 1 談話室 8 名出席
 ・総会資料の最終確認 ・大磯史跡バスツアー手配の確認

■第 39 回定期総会

- 5 月 13 日(火) 10 時~12 時(総会：~10 時 30 分) 第 1 談話室 16 名出席
 総会司会：伊東会員 総会議長：竹内代表 議案書・会則・会員名簿配付

第一議案 令和 6 年度事業報告

- 史跡めぐり 4 月例会日を充てたが、雨天のため翌 4 月 10 日に「俣野別邸」訪問を実施
- 公民館まつり 「藤沢の巨樹」を展示した(10月19-20日)
- 会誌『鶴沼』第124号(令和 6 年 12 月 1 日発行 130 部制作) 12 月例会で配付、郵送作業
- 新年会 令和 7 年 1 月 14 日(火) 「さかな家」で開催。 12 名参加。

第二議案 令和 6 年度収支決算報告

大川久会計担当より報告：収入：61 万 2,136 円(繰越金 48 万 4,136 円 会費 12 万 6,000 円 雑収入 2,074 円) 支出：8 万 9,814 円 次年度繰越金：52 万 2,396 円 会計監査報告 渡部かほり監査役より報告

第三議案 令和 7 年度事業計画(創立 50 周年記念とする)

- 大磯史跡めぐり：マイクロバスで往復(5 月運営委員会時=5/27)
- 鶴沼市民センターまつり出展：鶴沼を語る会 50 年のあゆみ
- 講演会『遊行寺の歴史』圭室文雄氏(歴史学者・当会会員) 11 月 8 日 午後 1 時 30 分~鶴沼市民センターと共催)
- 会誌第 125 号講演会・50 年のあゆみ特集号制作
- HP で会誌 1 号~最新号を公開

第四議案 令和7年度収支予算

予算収入額 67万 6,396円 支出額 22万 4,150円を計上

第五議案：令和7年度役員

今年度は役員改選にあたる年だが会の創立50周年事業があるため代表、副代表、監査役、会計すべての役員を留任とした。なお副代表をもう一名選任との話があったが誰にするかは運営委員会に一任することとした。

○ 2025年4月15日に鶴沼公民館は鶴沼市民センターに統合され、公民館の名前はなくなった。これに伴い会則、会誌裏表紙、帳票類などに記載の鶴沼公民館は鶴沼市民センターに変更する

☆これらすべての議案は出席した全会員の拍手をもって承認された

5月例会 総会后、鶴沼郷土資料展示室で開催の「江ノ電の移り変わりー鶴沼を走り続けて120余年」を説明付きで見学した。

5月運営委員会

5月27日(火) 記念行事の第1弾「大磯史跡めぐり」をマイクロバスを利用して実施。鶴沼市民センター発：10時 同センター着：15時。参加者10名。
詳しくは会誌125号/50年のあゆみを参照

6月例会

6月10日(火) 10時～12時 第1談話室 8名出席
・大磯史跡めぐり報告 ・5月サークル交換会報告：鶴沼市民センターまつりに参加申し込む。テーマは「50年のあゆみ」 それ以外の記念行事の進捗状況のアップデート。HPで会誌公開の作業は外部に依頼、進めている。

6月運営委員会

6月24日(火) 10時～12時 第1談話室 7名出席
・公民館まつり申し込み 講演会「遊行寺の歴史」11月8日(土) 午後1時30分～3時開催をセンターに申し込んだ。鶴沼市民センターと共催とする

7月例会

7月8日(火) 10時～12時 第1談話室 8名出席
・高橋会員 鶴沼の古い地名について
<朗読> 「鶴沼の尼寺と作家の阿部昭」佐江衆一著を刀根恵子会員が朗読

7月運営委員会

7月29日(火) 10時～12時 第1談話室 3名出席
異常気象で体調を壊すものが多く少数の集まり

8月例会

8月12日(火) 10時～12時 第1談話室 8名出席
・市民センターまつりの展示材料を提示
・徳富蘆花の「思い出の記」藤沢から鶴沼への道すがらの描写をもとに、有田会員に話してもらった。「思い出の記」は蘆花自身の思い出の断片を生かして書かれたものと言われている。登場人物の関係図を配布

8月運営委員会

8月26日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

9月例会

9月9日(火) 10時～12時 第1談話室 12名出席
・市民センターに向けて展示材料最終確認・当日役割分担を決めた

9月運営委員会

9月30日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

10月例会

10月7日(火) 10時～12時 第1談話室 10名出席
・市民センターまつり最終確認：展示作業 10/16 10時より約2時間
タイトル「鶴沼を語る会 50年のあゆみ」
・講演会：11/8(土曜日) テーマ：開山700年「遊行寺歴史—カリスマ的生き仏 遊行上人の宗教活動」
・チラシをはじめとした告知について(チラシ800枚 毎日/朝日/タウンニュースへアプローチ
・市交広報番組レディオ湘南協力依頼について
・鶴沼市民センター建て替えによる東屋海浜門柱の取扱いについて(市郷土歴史課と話し合い

■第49回鶴沼地区市民センターまつり

10月18日(土)-19日(日)

50年のあゆみを展示。パネル4枚に創立の経緯、活動年表、公民館まつり展示、講演会、対外活動、メディアによる当会紹介、会誌『鶴沼』創刊号からの

変遷を写真を中心にビジュアルな展示とした。題字は刀根会員による揮毫

10月運営委員会

10月28日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席
タウンニュース取材(11/7)号に掲載 当会と講演会開催の紹介

講演会「遊行寺の歴史」11/8(土) 聴講者160人弱 成功裏に終了

11月例会

11月11日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

11月運営委員会

11月25日(火) 10時～11時 第1談話室 6名出席
・会誌125号/50年のあゆみ冊子 ・講演会アンケートの報告
・新年会2026の案内確認

※藤沢市シティプロモーション課との打ち合わせがあったが、急遽キャンセルし伊東大介さんの葬儀に4名が会葬した。

12月例会

12月9日(火) 10時～12時 第1談話室 9名出席
・講演会「遊行寺の歴史」の聴講者アンケートについて
・市広報課からの「ハミングふじさわ」番組収録協力依頼について
・NHK「新日本風土記」取材依頼について
・会誌125号並びに「鶴沼を語る会50年のあゆみ」冊子について
・新年会2026について 出席者確認(7名) 例会欠席者にはメールでフォロー

12月運営委員会

12月23日(火) 10時～11時 第1談話室
・今年最後の運営委員会。今年の活動について
・会誌125号の配付について(印刷：12/19 製本：12/22 130部作成)

<会員>40名 2025年12月1日現在

入会会員：永井純一さん(2024年11月12日)

貴田航さん/田中淳一さん(2025年4月1日)

物故会員：伊東大介さん 2025年11月22日逝去

編集後記

■今年の夏は異常気象で、その暑さから体調を崩す会員が多かった。会の創立50周年ということで、5つの記念行事を行った。5月の「大磯史跡めぐり」バスツアーに始まり10月の鶴沼センターまつりでは「50年のあゆみ」を展示、11月の圭室文雄先生による講演会「遊行寺の歴史」には大勢の聴講者が来られ成功裏に終わった。さらに会誌『鶴沼』の創刊号から最新号までの全ページをHP上で公開した。さらに記念講演会特集の会誌125号と「50年のあゆみ」を冊子にまとめ、50年の記録を残すことができた。サークル活動が50年続くことは稀なようで新聞にも取り上げられた。これからも前向きに活動し、楽しく集まれる会でありたい。(弥)

■「鶴沼を語る会」50周年ということで忙しい一年になった。会誌も分厚いものになった。今年は猛暑や体調を崩される会員もいて計画が実行できるか不安になったが、皆で計画を完遂できたことでほっとしている。特に市民センターまつりでの「鶴沼を語る会 50年のあゆみ」の展示は竹内代表がほぼ一人で用意されたといっても過言ではない。また記念講演会は圭室先生の熱意と聴衆を引き付ける内容で大成功であった。最後の参加者の大拍手でそれを実感した。最後に伊東大介会員の急逝はこれから活躍を期待されていただけにショックであった。(久)

■初めて会誌『鶴沼』に文章を載せたのは第83号平成13(2001)年9月号であった。以後、ほぼ毎号に記事を書かせて貰って25年になる。内容も本業の建築をはじめ、郷土史、伝記、美術、文学、自然科学、動植物とほぼあらゆる分野に手を染めた。今思えば、無謀である。だが、作詞家の松本隆氏が「興味のある事」が世の中に存在するのは幸せなことだ、と書いていた。会の大先輩、鈴木三男吉氏は92歳で「鶴沼と城夏子」を執筆されている。小生も92歳になった今年、頑張ってみる積りである。(岡田)

■今年は創立50周年。思えば私が入会した当時のメンバーは佐藤和子さんだけになってしまった。あの頃は公民館長、主査の方が会の運営を助けてくれ教職や出版に係る人たちが鶴沼に関する事柄を書き、後世に残そうと意欲を燃やし活動していることに私は圧倒されていた。会の発足時は鶴沼の様々なことを語り合うだけだったが、これらを記録して残そうということで会誌『鶴沼』が生まれた。当初はページ数も決めず少ないページで年に何回も発行した。30号ぐらいまでは趣のある絵で表紙を飾り文は手書き、筆書きでつくった。膨大な記録は将来、鶴沼地区の財産になると思う。(有田裕一)

『鵜沼』第125号
令和7(2025)年12月23日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼市民センター内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>